
PARADISE ~ 建国記

来生尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PARADISE 建国記

【Nコード】

N2350Q

【作者名】

来生尚

【あらすじ】

南方領主の長男カイ。

順風満帆の彼の人生に突然転機が訪れる。
全てを持つ者から、全てを持たぬ者へ。

異世界のとある大陸が舞台の歴史小説です。

数百年に及ぶ群雄割拠時代を過ぎ、この大陸は4人の領主が分断して治める、四頭時代を迎えていた。

治める領地の場所からそれぞれ、北方領主、南方領主、東方領主、西方領主と呼ばれている。

かつての戦乱の名残により、北方に西方領主の領地があったり、東方に南方領地の飛び地があったりするが、あえてその地に侵略しようという動きは近年ない。

経済力、軍事力。

4領主の実力は拮抗しており、どこか一方がある一方に攻め込んでも戦乱が長引くことが容易に想像でき、兵力を一方に集中した拳句、背後から他領主に侵略されかねないという危険が孕んでいるからだ。

実際に数十年前までは小規模ながら戦乱があったが、どの領主も戦が己の利益に結びづらい事を身をもって知った。

多少なりとも小競り合いはあるものの、大陸は平和といっても良いほど、戦禍とは縁の無い日々を送っている。

4領主の中でも、最も肥沃な大地と経済的優位を持っている南方領主は、この世の春を謳歌し、妻の他にも何人もの愛人を抱えている。

南方領主の長男カイ。

彼は、南方領主の幾人かいる愛人の中の一人を母に持つ。

幸いにもカイ以外の男子は短命で、他は皆女子だった為、南方領主の跡継ぎという地位が劣せずして転がり込んできた。

領主の長男という地位に甘んじる事なく、彼は貪欲に様々な事柄を吸収し、後の統治者として内外から認められている。

「女狂いの南方領主」と呼ばれる彼の父が統治に興味を示さず表舞台に立つ事が少ない事もあり、事実上の支配権はカイが握っている。

る。

故に、領主の公邸はカイの居城といつても良いほどである。今日も、彼の元には商人たちが訪れる。

「カイ様、今年の穀類の物価ですが、前年より下がるかと思われま
す」

「そうだね。去年は豊作だったからね。どのくらい下がるか予測は
付いている？ 他領にも売るつもりなんですよ」

商人はニコニコとした笑顔のまま、カイの前でそろばんを弾く。

「ざつとこんなものかと」

「それはうちに入れる価格？ それとも他領への価格？」

恰幅の良い商人は、にんまりと笑みを浮かべる。

「それはカイ様次第でございます」

カイもまたニッコリと笑みを浮かべる。

「利権なら与えられないよ。僕はただの領主の長男だからね。決定
権があるのは親父だよ」

「これはこれは。事実上の南方領主と呼ばれるカイ様のお言葉とは
思えませんなあ」

「誰がそんな風呼んでいるかは知らないけれど、ただ親父様の手
伝いをしているに過ぎないよ。ねえ、ナギ」

ナギと呼ばれたカイの二歩後方に控えた青年が恭しく頭を下げる。

「カイ様のおっしゃるとおりです。オレたちはあくまでも領主様の
補佐に過ぎません」

女性と間違われるほどの長髪を垂らしつつ、ナギはゆっくりと丁
寧に一礼し、カイの傍に立つ。

幼馴染で生まれた頃から一緒に育てられてきたナギは、カイの側
近中の側近であり、右腕として国政においてその才能を遺憾なく発
揮している。

領主への皮肉交じりに、カイと二人、南方領主の双肩などと呼ば
れることがあり、一官僚に過ぎないがその地位以上に影響力は大き

い。

「あまりこの会話を長引かせるのは得策じゃないよ。最近私邸の動きが忙しい。こちらに何かを仕掛ける為に、言質を取るチャンスを探っている可能性もある」

「んー。わかった」

そつと耳打ちすると、ナギはカイの傍を離れて帳簿を捲りだす。

今年の作付状況。収穫予測。

あとは大河が収穫前に氾濫しなければ、今年は豊作になりそうだな。

ナギは帳簿に視線を落とすにつつ、カイと商人の会話にも目を配る。商人はというと、ナギがそつとカイに耳打ちした事が己を遠ざける助言のように聞こえ、冷や汗が流れて目が泳ぎだす。

南方領でこの二人に睨まれては、商売は成り立たなくなる。

「まあまだ収穫期が来ていないから、詳しい話はまた後日。もうちょっと大河の氾濫の予測がいたりすれば、計画的に領内の運営も出来るんだらうけどなあ」

「それは大河の化身たる水神以外は不可能かと」

商人の思惑などどこ吹く風で、全く気に留めることもなく暢気な事を言うカイに、商人の緊張が和らぐ。

苦笑交じりに商人が言うのを聞き、カイは肩を竦める。

「ま、そうだよな。僕の出来ることといえば灌漑事業に予算を割り振るくらいだよな」

うーんと声を上げて腕組みをして考え込むカイの様子をしばらく眺めていたが、自分の世界に没頭してしまっているようなので、商人はナギに一礼して部屋を出る。

「大河の化身なんて人は言うけど、あれは災いをもたらすモノじゃないの？ ナギ」

語りかけられたナギは、くすつと笑ってカイを見る。

「オレも実物を見たことがないし、五穀豊穡をもたらす神なのか、それとも大河を氾濫させて人を苦しめる災厄を運ぶ忌み神なのか、

なんとも言えないね。カイはどう思う」

「神なんてものを信じてないからどうでもいいよ。ああ、ただ大河を氾濫させるのは止めて欲しいものだね。これで収穫前に氾濫させられたら、領民も僕たちもたまつたもんじゃないから。あ。そういえば、5年に一度の祭りはもう終わつたんだっけ」

問われたナギは紙の束の幾つかを持ち上げ、一番下にある分厚い一冊の本を取り出す。

それはナギの手帳のようなもので、公私さまざまな記録をつけているもの。

「行われたみたいだよ。今回の持ち回りは西方領主だったはずだな」
「なんでうちの領地の神様のことなのに、4領で持ち回りでやってるんだろっね」

「まあ、その分人柱を出さないで済んでいるんだし、古来からの決め事のようなから理由なんて今更わからないだろ」

「確かにそっか。そんなこと気にするよりも、色々やるべき事もあるし。そんな事を考えるのに無駄な労力を払う必要はないかな」

「そうして下さいカイ様。今日の仕事も山積みです。次の面会客を入れてもよろしいですか」

畏まつた芝居がかつた様子で謙るナギに、カイは苦笑を浮かべる。

「それはどうせなら親父様に言つてやつてくれ」

「オレが言えるか。カイが言え」

「無理。私邸に行つたところで、女の話しか興味ないんだから。じや、お仕事再開で」

「では領主様のお顔に泥を塗らないように、精一杯励んでくれ」

その言葉を聞き流し、カイは軽く手を上げるだけで応える。

そんなカイの様子に、ナギは内心溜息をついた。

お互い十代の若造なのに、すっかり領内の政治を行うことに慣れてきつてしまった。

若干おっとりとしたところがあるものの、たまたまカイにその才能があつたから良いけれど、これがカイでなかったら今頃南方領は

どうなっているのだろう。

そんなことを考えても仕方のないことか。今日の前にあることを一つ一つ片付けるしかオレたちには出来ないのだから。

権限も決定権も無い、領主の長男とその補佐にすぎない。しかしそれを気に病んでどうするというのだ。

くだらないことを頭から振り払い、次の客人を部屋の中に招き入れる。扉の向こうから、薄汚れた服を着た男が平身低頭といった様子で現れる。

「ああ、タキじゃないか？。久しぶりだな、元気だったか？」

男に気付くと、カイは男のもとへと歩み寄る。

タキと呼ばれた男は、ペコペコと何度も頭を下げる。

「カイ様、ご無沙汰しておりました。やっと領内の測量完了の目処が立ちましたので、ご挨拶に参りました」

「わざわざすまないね。仕事帰りに寄ってくれたんだらう。ありがとう、タキ。今も灌漑事業のことを考えていたところだったんだ」

ガサガサに荒れたタキの手を握り、カイは感謝の意を表す。タキのほうはというと、恐縮しきりといった感じで顔を強張らせる。

「仕事で汚れておりますから、どうぞお手をお離し下さい」

「いや。僕には全然わからない難しい事を一人で請け負ってくれているんだから、感謝して当然だよ」

「とんでもない。カイ様からのご依頼により豊富な資金を出していただき、かねてよりの研究が出来ており、大変感謝しております」

お互いに感謝を口にして頬を染めているのを見て、ナギは呆れるように溜息を吐く。

いつもそうだ。カイは父親である南方領主のように傲慢に振舞ったりしない。しかし、気安すぎるんじゃないだろうか。市井の民だろつとこの調子だ。いつかその人の良さを利用されるのではないだろうか。

感謝の言葉を述べて、ニコニコと嬉しそうにタキの仕事の話を聞いているカイを見て、ナギは心の中で呟く。

これから手に入れる名誉と富を思えば、もつと居丈高になつてもおかしくないだろう。それを傘に着て、権勢を振るつてもおかしくないのではないだろうか。

しかしそのような人物であつたら、今頃カイの傍にはいないか。

部屋の片隅で記録をとりながら、ナギは思う。

窓枠に手を置き、視線を遠く領主の私邸のほうへと向ける。

数年前に生まれた男児。

どうやら火種になりそうだが、カイはどう捌くか。困難に見舞われた時、何が出来るか。

今から策を立てておいて損は無いな。

ナギの視線は険しく、カイの笑い声など届いていないかのようにだった。

数年間、カイの周りは平穩そのものだった。

ナギの心配の種である男児は現在8歳。12も離れているというのに、兄弟仲良く公邸で遊ぶ姿が頻繁に見られる。

カイの弟トビは、自分の母以外の若い女に溺れる父にも、嫉妬の炎に身を焦がす母からも距離を置くようになり、兄であるカイの傍にいる事が多くなった。

公邸で執務をしている時にはさすがに席を外させるが、それ以外の時には狩りに連れて行ったり、領内を一緒に馬で周ったりすることもある。

領民たちはこの仲のよい兄弟を微笑ましく思い、その姿を遠巻きに眺めている。

カイとトビの二人が、きつとこれからお互いに支えあつて南方領を支配していくのだろう。そう、誰もが思っていた。

いつものようにカイが公邸で幾人かの商人たちと歓談していると、穏やかな場を凍らせるようなガンツという大きな音が響く。

「何があつたのでしょうか」

商人たちが表情を曇らせ、カイの顔を見る。

「さあ、あまり穏やかな音ではないね。ゲイン」

部屋の片隅に控えていたカイの護衛兵である屈強な男が腰の剣を鳴らしながら小走りにカイのもとへと近寄る。

「はっ。自分が外を見て参ります」

「そうだね。そうお願いしようと思っていたのだけれど、ちょっと状況が変わったみたいだよ」

徐々に乱暴な足音が近付いてきて、カイが鋭い視線を扉の方へと向ける。

商人たちは怯えたような表情でお互い身を寄せ合い、カイはゲインとナギという二人の腹心の部下と顔を見合わせる。

「事前に何か情報は掴んでいた？」

カイがゲインに訪ねると、ゲインは首を横に振る。同じ質問をされたナギもまた、首を横に振る。

「他領ではないと思いますよ。こんなところまで容易に入ってくる事は出来ないでしょうから」

「的確な分析、ありがとう」

苦笑交じりに言うと、カイは心の中で覚悟を決めた。

この日が来るかも知れないことを、薄々感じてはいた。ずっと、気付かないフリをしていた。認めたくなくて。

ボタンと大きな音と共に、兵士たちが雪崩れ込んでくる。

その先頭にいるのは、軍の大將を勤める歴戦の猛者でカイのよく知っている人物だ。

互いに目が合うと、大將は目を逸らす。

あまり剣の腕の良くないカイに、大將自ら指南したこともある。

出来の良い生徒ではないが、大將はカイのことを可愛がっていた。視線を逸らした大將とは対照的に、カイはまっすぐに大將を含む甲冑に身を包んだ兵士たちを見据える。一点の曇りもない瞳で。

口元に笑みを称え、カイはナギの肩をぐいっと押しつけ、兵たちの前へと一歩歩み寄る。

普段はおっとりだとか、のんびりだとか言われることの多いカイの瞳の険しさに、ナギは一瞬怯む。

「全員逃がして」

ナギの肩から手を離す瞬間、小声でカイは指示を出す。

それに従って、ナギは商人たちを兵士たちが入ってきたのとは別の扉のほうへと誘導する。

一連の動きを視界の端で捕らえたまま、大将は何一つ言葉を発せずにいる。

部屋を出る商人は、この部屋の中でこれから何が起こるのか全く想像がつかなかった。わかるのは、この部屋の中では内密な話し合いがあるのであるということだけ。そしてカイにとってあまり好ましくない事が起こるのだろう。

戦乱が起きたのだろうか。そうなるとこれからの商売は。

商人は甲冑に帯剣という兵士たちの姿に、穏やかとは言いがたいものを感じ取っていた。

パタンと部屋が閉まる音がすると同時に、大将は大太刀を抜き、カイへと向ける。

「南方領主長男カイ。横領の罪により逮捕いたす」

ゲインとナギがカイの方へと視線を走らせるが、カイは至って平穩を保ったままの表情で大将を見つめる。

「で、僕を捕まえてどうするつもり」

「本日までの功績により、お命までは頂戴致しませんが、流罪と致します」

苦渋に満ちた表情の大将に、カイは対照的な笑みを浮かべる。

「僕を捕まえる事が出来るのは、親父だけだよ。女たちに命令されているわけじゃないよね」

ギッと大将の瞳が鋭くなる。

「そのようなことはありません」

「なら、従うしかないね。いいよ。それならそれで」

南方領内でのカイの権勢を思えば、仮に流罪になったとしても早

晩解消されるだろうとカイは睨んでいる。

この公邸内で父の姿を見たことは、近年全くない。私邸に籠りきりで、政治に興味なんか示さない。

カイがいなくなれば、この国が立ち行かなくなることを、この国の政治を掌握しているカイは思っている。

逆に、あまりにもあつさりとかイが承諾したので、大将たち兵士は拍子抜けしたような表情で立ち尽くす。

ゲインとナギは、逆に眉間の皺を深く刻んでいるが。

「否定なさらないということは、身に覚えがあるということですね」
兵士たちの間から、カイの義弟の母の兄弟である大臣が身を乗り出す。

その姿を見て、カイの口元がピクリと動く。

大臣とはいっても形だけのもので、この公邸で政治に関わったこととはない。色香で買った大臣の椅子を持っているだけで、政治的権力は何も持っていないはずだ。

「おや、珍しい顔だね。この騒動の脚本家はお前かな」

言われた大臣の顔が醜く歪む。嫉妬や憎しみが溢れていることが隠し切れない。権力の頂点を極めたい大臣にとって、カイは目の上のこぶでしかない。

「何をおっしゃいます。全てはあなた様の招いた事。横領の罪、お認めになられるのですね」

ニヤつとカイが晒す。

「横領？ 残念ながら横領しなくてはならないほど、日々の生活に困窮してはいないね。そもそも私財を蓄えようとも思ってもいないが、横領の根拠は何かな」

カイはどさつと椅子に座り、足を組んで大臣を見据える。

ナギとゲインはカイの両脇に立ち、いつ剣が向けられても対処出来るように、腰にぶら下がる剣に片手を添えている。

「その椅子。それは領主様のものである、立たれよ」

まるでそれが宝物であるかのような勢いで大臣が言い放つのを、

静かな瞳でカイは見つめる。

どのみち捕まる事には変わりないのだから、じたばたしても仕方がないと自分に言い聞かせ、なるべく平穩を保つようと深呼吸する。

相手は何年もこの時を狙っていたのだろうから、簡単にこの状況を覆すことは出来ないだろう。

幾重にも巡らせたカイを陥れる罠に、きっと気付かないうちに嵌ってしまったのだらう。それは自分が迂闊だったのだ。

ふんつとカイは大臣を鼻で笑い、立ち上がる。

「いいよ、別に立つくらいなんてことない」

「あまり刺激すんなって」

カイの耳元でナギが囁く。

「いいんだ。どうせ結末は変わらない」

ナギの言葉にカイが溜息交じりに応える。

「案内してもらおうか、父の元へ」

大臣たちの前にゆっくりと歩み寄りながら、カイが告げると、大臣はびくびくと顔を引きつらせる。

「大逆人を領主様に会わせるわけにはいかないだろう」

言い放つ大臣に、今度はナギが険しい表情のまま告げる。

「ここにいるのは、次期領主カイ様です。あなたはカイ様のご命令に逆らうおつもりか」

言葉とは対照的な穏やかさは笑顔で、更に大臣を追い詰める。

「父はこの件を既に承知しているのか。あなた一人の判断の訳がないですよね」

カイの後見人と評されるナギの父は、幾人かいる大臣の中でも最も権勢を振るっている。その父である大臣の知らないところでカイの処遇が決められているとすれば、逆に目の前にいる大臣の調略であることがつきりする。

仮にナギの父がこのことを承諾したとしても、していなかったとしても、カイの側近である自分に一言ないわけではない。

また事前にこの動きを察知していたのなら、この動きを全力をもって封じようとしていたはずだ。

カイを担ぎあげる事は、父とナギにとってこの領内での己の地位を向上されることになるのだから。

故に、カイを陥れるようなことをするわけがない。それをすれば、己自身を追い詰めることになる。

つまり、今回の騒動はカイ一派を陥れるための、トビの生母一派の計略だということは明白だ。

それをこの大臣はどのようにして説明するのか。果たして説明出来るのか。

どうせ出来るわけがないと、ナギはせせら笑う。

「全ては領主様のご意思。カイ様に組するそなたの父には関係ないこと」

カイとナギは顔を見合わせ、そして二人は目を伏せた陰りのある笑みを浮かべる。

「全ては事前の手はずどおりに」

「かしこまりました」

幼馴染であり親友である側面を隠し、ナギは臣下の礼を取る。

「父が絡んでいるのなら黙って甘んじて受けよう。鎖に繋いで連れて行けばいい、ただし父のもとへだよ」

カイが大臣の前に歩み寄り、その両手を目の前に差し出すと、大臣がにやりと笑う。

「全てをお認めになられるのですね」

「何の根拠も示さない者の言葉には耳を貸すつもりはないよ」
腕を下ろし、大将に視線を送る。

「先導は頼むよ」

「かしこまりました」

大将はあえて鎖に繋がず、カイの周囲を兵士で囲んで公邸から領主の私邸へと向かう。

ただならぬ雰囲気、公邸の使用人たちは青ざめ、口々になにや

ら囁きあうが、カイの耳には届かない。

一方カイの消えた部屋の中では、ナギが大量の書類をかき集めている。

カイがこの領内でやろうとしていたことの痕跡を消すために。表向きの石高や貿易に関する資料や、領内の自治に関するものなどは全て整理して残してある。全てを消してしまえば、領主なんてどうだっていいが、民が困る事になる。

ただ、それ以外のカイが独自に動き予算立てて動いていた案件に関しては、後々に残しておくつもりはない。

原本は既に別のところに保管してある。

カイが執務中に使う分だけを書き写して、部屋の中に置いてある。その全てを集め、半分をゲインに託し、残り半分を自分の懐に隠し持つ。

あまり多くないそれは、少し着込んで見える程度の厚みしかなく、ゲインとナギはその他の公邸から持ち出すべき物を持ち、それぞれの屋敷へと戻る。

今回の計略を潰す為、そして仮に潰すことが出来ずに流罪になった時に、カイを支えることが出来るように動き出す。

ナギは父を尋ねようと父の屋敷を訪れたが、呼び鈴を押しても誰も出てこず、屋敷の中に踏み込むと血の花が咲いていた。

血の海の中、父が呻き声をあげているのを見、ナギは父の元へと駆け寄る。

「に……げ、ナ……」

それ以上言葉を発することなく、父は血を口から吐き出し、息絶える。

視線を動かすと、邸内のあちこちで血の海が出来ている。

「一体、何が起こっているんだ」

ナギは呆然と立ち尽くし、むせ返るような血の匂いの中、それ以上の言葉を発することさえ出来ずにいた。

私邸と呼ばれる、南方領主の公邸のすぐそばに位置する豪華な建物の中にカイが足を踏み入れると、多種多様な香水の匂いが入り混じった鼻を衝く匂いがし、眉間に皺を寄せる。

実母が死んでからあまり立ち寄ることのなくなった私邸は、色と花の支配する娼館のようだ。

カイの私室もこの中にあるけれど、次の領主と目されている自分に父の愛人たちが擦り寄ってくるのも嫌で、父のご機嫌伺いにたまに訪れる程度だった。

男よりも圧倒的に女の多い屋敷を兵たちに連れられて進んでいくと、南方領主の寝室に辿り着く。

こんな時でも寝室かと、カイは心の中で父を蔑む。表情には一切出さないが。

重厚な扉が開くと、酒に酔っているのか真っ赤な顔をした南方領主がでっぷりとした体をベッドから起こしてこちらを見ている。

領主の膝に掛けられている布団がすつと横に引かれ、引かれたほうが盛り上がっているの、ああそこに女がいるのかと、冷めた目でカイは見つめる。

「久しぶりだな、カイ」

酒焼けしてしわがれた声で領主が口を開くと、カイは対外用の笑顔を浮かべる。

「お久しぶりです、父上。お声掛けがあったかと思いきや、このように重々しい対応で、戸惑っております」

先に仕掛けたのはカイ。

カイの射抜くような視線と、対照的な親しみ深い口調に、領主は咳払いをして交わすのが精一杯だ。

ゴホンと一つ咳払いをし、領主は一度逸らした視線をカイへと向ける。

「信じがたい話を聞いたが、お前は私利私欲の為にこの南方領の領民たちに重い税を科し、私財を蓄えていると聞くが本当か」

ふっとカイが鼻で笑う。

「実際にそうなのかは、公邸にございます帳簿をご覧いただければおわかり頂けるかと思えます。また実際に領民たちが重い税に苦しんでいるのかどうか、その目で領内をご検分頂ければと存じます」

公邸には何年も立ち寄らず、領内を検分したことなど数えるほどしかない領主は、ぐっと口ごもる。

「全てご自分の目でお確かめ下さい。真に不肖の息子であるのかどうか、父上がその目で確認して判断下さい」

まっすぐに自分を見つめてくるカイの視線に、領主は視線を逸らす。

自分の左脇に横たわる女性、カイの義弟トビの母の鋭い視線が自分に向けられているのを感じると、何度も繰り返し咳払いをする。

カイの言うことこそ真実かもしれない。

しかし、この愛すべき女性の願いを叶えたいとも思う。それに、もう……。

「……全て遅い」

微かに呟いた領主の言葉に、カイは首を傾げる。

「罪状は明白である。カイ、お前を東方飛び地への流刑とする。水神の生贄にしないでだけマシと思え」

「は？ 一体何を」

「飛び地では南方領主であるワシの命令が届きにくく、領内の治安情勢も良くない。お前に全て任す」

「あなたっ。何をっ」

一糸纏わぬ姿の女性が、起き上がるうとして慌てて衣を手元に引く。

艶かしいその姿に、カイは一切の感慨を受けない。むしろ醜いものを見せ付けられたような胸糞の悪い気分になる。

「流罪にし、国事からこの者を外すと、そうおっしゃられたではな

いですか」

「……うむ」

居心地が悪そうに、領主は女からもカイからも目を逸らす。

「領地の全てをトビに託すと、そうおっしゃっていたではありませんか」

「……ああ」

そういうことが。

カイは目の前の三文芝居を眺め、たった一人の弟の事を思う。

悪い子じゃないが、この母がいたのでは。

領主の腕を掴みギャンギャンと喚きたてる女を振り払うように、

領主は居住まいを正す。

「あんな荒地の行政権くらいカイにくれてやれ。西方領に囲まれて、祟り神が居を構えるような場所だ。ワシの決めたことにいちいち口を出すなっ」

うるさそうに女をあしらうと、領主はカイの方を見る。正確にはカイの目を見ず、カイの肩辺りを見つめている。

「悪評が立っているお前に領内ことは任せられん。加担したものだちへもそれ相応の始末はつけてある。一両日中に東方飛び地へ行け。以上だ」

一度もカイの目を見ようともしない領主に、カイは慇懃無礼とも思えるような仰々しい礼をする。

「父上のお許しが出ない限り、わが生涯、飛び地より出ないとお約束致しましょう。では」

踵を返し、ポンつと公邸から先導してきた大将の肩を叩くと、重い気持ちを振り切るように領主の寝室を後にする。

平気で家臣たちに寝室に立ち入らせ、しかも女に同席させるようでは、女狂いの南方領主と揶揄されるのも致し方ない。

そのような人物であっても父であるので、それなりの思慕の気持ちを持っていないわけではなかったが、見苦しい光景を見せられ、カイの心は冷える一方だ。

領主の寝室まで着いてきた兵士たちも、カイの後を追おうとはせず、カイは一人私邸の外に出る。

見上げると、城と呼ばれることもある公邸の高楼が目飛び込んでくる。

そこを私邸の私室の代わりに使っていたが、恐らくそこに立ち入ることは出来ないだろう。

公邸の入り口には甲冑に身を包んだ兵士たちが、幾重にも門の周りに立ちはだかっている。

カイに何も声を掛けようとはしないが、中に入れることは拒んでいるようだ。

兵士たちのこの対応を見ると、どうやら公邸から身包み剥がした状態でカイを追い出すことがあの女たちの狙いだったのだろう。

あわよくば命さえも奪ってしまいたいのだろうが、父のあの対応を見ると、命まで取ってしまうと領主たる父の不興を買い、己の立場も危うくなると踏んだか。

剣も、一本のペンさえも持たない、明日の着替えさえもない自分はこれからどうしたらいいのだろう。

公邸を見上げ、自問自答するが、その答えをカイは見つけられずにいる。

しばらく立ち尽くしてから、婚約者であるシンシアのことを思い出す。

領主である父の弟の娘で、カイの従兄妹。

彼女はどうしているだろう。親によって決められた婚約者ではあるが、情を交わし、恋人の仲であるのは周知の事実。この害が及んでいなければ良いが。

カイは公邸から少し離れたシンシアの屋敷に足を向ける。

途中通り過ぎたナギの屋敷の異変には気付かぬまま。

シンシアの住む屋敷を訪れると、叔父は苦々しい顔をカイに向ける。

「何をしにきた」

その短い言葉に、全ての拒絶が表れているのをカイは感じた。

「シンシアに会いに。婚約者ですから」

何かを慮るような表情を浮かべたまま、屋敷の入り口でカイの叔父が考え込む。

付き従う警備のものたちも、一様に困惑の表情を浮かべている。

入れるべきか、入れざるべきか。

全ての騒動を既に知っているのだろうか、完全に失脚したとは言いがたいカイの処遇に悩んでいるがわかる。

カイはふつと笑みを浮かべる。

「全て、叔父上はご存知だったのですね」

返答はせず、怪訝そうな顔をする叔父にカイは畳み掛ける。

「でも僕には何も伝える気は無かった。そのようにお見受け致しますが」

しばらく沈黙が続く。

喉まで引つかかった何かを、叔父は口にするのを躊躇っているようにカイには思える。

何を隠しているのか。その真相を知りたいとは思いますが、きっと口にはしないだろう。

膠着状態を破ったのは、甲高い女性の一声。

「お父様はわたくしを守ってくださいましたの。それをあなたに責められる言われは無いわ」

頭一つ小さい綺麗に着飾った令嬢が、警備のものたちの間を抜けてカイの前に現れる。

「シンシア」

カイの呼びかけに、シンシアは令嬢とは思えないような、まるで汚い物を見るかのような侮蔑の目を向ける。

「気軽に声を掛けないで下さるかしら」

「シンシア？」

問いかけるように投げかけたカイの言葉を鼻で笑い、シンシアは

腕組みをしてカイを見上げる。

「流罪になられた方が何の御用かしら？　ここは南方領主の弟の屋敷よ。罪人が立ち寄るような場所ではないわ」

切り捨てるような言葉に、今まで兵の言葉も父である領主の言葉も笑みで流してきたカイの顔色が曇る。

「もう一度聞くけれど、何しに来たの」

カイの脳裏には、ほんの数日前に愛を囁いていたシンシアの姿が浮かんでいた。

好きだとか愛しているだとか、ありきたりの言葉ではあったけれど、確かにシンシアの瞳は自分への好意で満ちていたというのに、一体何故このようなことになったのだろう。

「まさか、一緒に来て欲しいなんていうんじゃないでしょうね。わたくしは御免よ。何も持たない罪人のあなたなんか、何の価値もないんだから」

履き捨てるように言うシンシアを後押しするかのように、叔父が口を開く。

「うちを、巻き込まないでくれ」

搾り出すかのような言葉に、カイの視界がぐるりと揺れる。

何もしていないのに罪人に仕立て上げられ、共に愛を囁きあう恋人であったシンシアにさえ何の価値も無いからと切り捨てられる。

自分の手の中にあると思っていたものは、結局は父の権力といった後ろ盾があったからこそ得られるものだったのか。

決して一緒に飛び地に来て欲しいと思って訪れたのではなく、シンシアがこの策謀に巻き込まれていなければと思っただけなのに。

いや、もしかしたらシンシアなら着いてきてくれるのではという淡い期待を抱いていたのではないか。

少なくとも、自分のことを心配してくれるのではないかと思っただけなのに。

そんな思いを打ち砕かれ、カイは口元にだけ笑みを浮かべると、

叔父とシンシアに軽く頭を下げる。

「もう二度とその顔を見せないで。ぼやっとして覇気の無いところも嫌いだったの。もうあなたのご機嫌伺いをしなくて済むかと思うとせいせいするわ」

別れの言葉を切り出すよりも早く罵倒され、もう一度シンシアの顔を見ることもなく、カイは屋敷を後にする。

どこに行けばいいのだろう。

ほんの数時間前まで手の中にあつた数多くのものを失い、居場所も無く、カイは公邸を見上げるように立ち尽くす。

決して権力を欲しいままにしていたつもりは無い。

しかしこのような結果を招いたということは、どこかで奢り高ぶり私欲の為に権力を己のものにしていると思われるような部分もあったのだろう。

そして同時に、自分自身がどれほど無力でちっぽけな存在なのかと、改めて感じている。

自分一人で何が出来る。

今日の飢えを満たす金さえも持っていない。路上に横たわる物乞いと何が違うところなのか。何も持たないという意味では全く同じではないか。

これから一体どうやって生きていけばいいんだ。

絶望にさいなまれ、カイは知らず知らずのうちに膝を折って路上に座り込んでしまった。

「無様だね」

どのくらいそうしていたのかわからないが、唐突にカイの頭上に甲高い少年の声が振ってくる。

聞き覚えのある声に顔を上げると、叔父である大臣と兵を引き連れて豪華な服に身を包んだトビが立っている。

「トビ」

カイの呼びかけに、トビは勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「これで全部僕のものだよ、兄さん」

普段見せる人懐っこい笑みとは全く違う嘲るような笑みに、カイの表情が強張る。

「兄さんがいけないんだよ。僕を邪魔者扱いして、政治には関わらせないから。実力でもぎ取っちゃった。ごめんね」

少年の無邪気さと残酷さを同居させた嘲笑を受け止め、カイはゆっくりと立ち上がる。

立ち上がれば、少年の頭は自分の視線よりも下で、その肩もまだ細くて儂い。

見上げるトビのくりくりとした瞳に、カイは絶望よりも哀れみを覚える。

本当に一人で全てを計画して行ったとは思えない。実際には生母と伯父に操られているに過ぎないだろうに。言っている言葉の意味を、真に理解しているとも思えない。

「お前はまだ10にも満たない。政治よりももっと子供らしい遊びをし、勉学に励んで欲しいと思っていたよ」

「子供扱いしないでよ。僕だって、領主の息子だ。父上が放り投げた領地領民についての責任がある」

「そうだね。今で無くてはならなかったのはどうしてなんだ」

「兄さんが、自分の為に領民を苦しめてるって伯父さんや母上が言ってたもの」

「……そう」

カイはポンつとトビの肩を軽く叩く。

「その肩に全てを背負うというなら背負えばいいよ。それがお前の選んだことなんだろ」

意外なほどあっさりトビに譲るといふカイの言葉に、トビがきよよんとした顔をする。

「何で？ 僕に譲ったら私財を蓄えること出来ないよ」

ふっとカイは笑みを漏らす。

全て言いなりに、小難しい言葉を覚えているトビの未来を憂いて。

「本当に僕がそれを欲しいと思っていたのか、そのうちわかるよ」
「トビ様、そのような罪人の戯言に耳をお貸しになられますな。あとは全てお任せ下さい」

カイの言葉にかぶせるように、大臣がトビの耳元に囁く。

「あ、うん。えっと、どうしたらいいの」

「公邸でお待ち下さい」

そう言うくと大臣が兵に目配せし、トビを公邸へと向かわせる。

何度も何度も振り返るトビの目が、カイには不安を訴えているようにも見えるし、勝ち誇っているかのようにも見える。

けれど、自分にはもう何もしてやれない。

切り捨てたのはお前自身だという憤りと、これからトビの周囲で起こるであろう醜い権力闘争を思い、手を差し伸べてやれないことへの無力感がカイの中で同居している。

ひときわ小さい背中が最後に振り返り、そしてゆっくりと公邸の中へと吸い込まれていく。

その姿は、兵士たちの広い背中に隠されてもう見ることは出来ない。
い。

「カイ様」

大臣の下卑た笑みと声に、カイは視線を向ける事さえ拒絶する。

ずっと、公邸を見つめたまま大臣を見ようともしない。

「本当はあなたのお命も頂きたかったのですが、そうすると領主様のご不興を買うことになってしまふので、あなたの腹心の命で代用させていただきました」

「どういう意味？」

挑発とわかっていてもなお、カイは鋭い視線を大臣に向ける。

数時間前に別れた二人の顔が脳裏に浮かぶ。

「言葉どおりですよ。いい見せしめになります。あなたに加担するとうとういうことになるよね」

「一体誰をっ」

勢いよく自分の胸倉を掴むカイを、大臣がせせら笑う。

「更に罪状を増やされるか？ それならそれでこちらとしては好都合ですぞ。カイ様がこのように取り乱すお姿、非常に貴重ですなあ」
嫌味たつぷりの言葉に、ふんつと鼻を鳴らしながらカイが突き飛ばすように大臣を離す。

「殺せるなら殺せばいいだろ。南方領にとってそれが最良だと思うのならばな」

「その自信、どこから出ているのでしょうか。もっとも、嫌というほど思い知りますよ、あなたには何の価値も無いということだね」
ポンつと麻袋一つをカイの顔に投げつけ、大臣がくるりと背を向ける。

「それ、旅費です。恵んで差し上げるだけ良しとしてください。さすがに他領を通過するのに物乞いのような真似をされて旅費を稼がれても困るのでね」

「勝手に行って来いということが」

「護衛をつけるのももったいないので。出来れば山賊あたりに身包み剥がされてのたれ死んでいただければ助かります」

一瞬、カイの脳裏にこのまま留まって再起を図るという案が浮かぶ。

この街の中に潜伏し、目の前の大臣一派を失脚させるよう暗躍すれば……。

「一応監視は付けますから。ちゃんと飛び地に向かって下さい。それと、定期的な報告もお忘れなく。あなたは飛び地の管理を任せられた小役人となんら変わりませんからね」

ぐくつとカイが奥歯を噛み締めるのを見ると大臣が笑みを浮かべる。下卑た笑みを残し去っていく大臣を目で追う事をやめ、カイは足元に転がる投げつけられた麻袋を見つめる。

これと手にしてしまつたら、地位だけで無く心まで打ち砕かれてしまつように思える。

例えこの身が朽ち果てようとも、心だけは気高くありたい。あのような下卑た笑みを向けられているにも関わらず、僅かな金に飛び

つくような真似はしたくない。

カイは麻袋には手を出さず、先ほどの不吉な言葉の意味を確かめるべくナギの屋敷に向かう。

ギーっと扉の開く音がし、ナギは蒼ざめた顔のまま振り返る。

思考回路はむせ返る血の匂いで凍結し、ただ音に反応したに過ぎない。

瞳には人影が写るのに、それが誰なのかとさえ考えもしないでいた。

「ナギ」

聞きなれた声に、ナギの瞳に光が宿る。

「カイ」

主従関係だとかという事はお互いの脳裏には浮かばない。

幼馴染で親友。

二人の関係は子供の頃と同じままで対峙する。

「ごめん、僕のせいだ」

ナギ同様に顔を蒼ざめさせ、カイが血の海の中に足を踏み入れる。横たわるたくさん死体の間を縫い、カイがナギの傍へと歩み寄ると、ナギが不思議そうに首を傾げる。

「なんでカイのせいなんだ。カイが父や母や妹を殺させたのか。違うだろう」

状況には不釣り合いなほど穏やかは笑みをナギが浮かべる。穏やかではなく、それ以外の顔を作れないだけかもしれない。

「カイはそんなことはしない。オレが誰よりもそれを知っている。だから泣くな」

ポンッとナギがカイの肩を叩き、柔らかな笑みでカイを見つめる。「何でお前が泣かないんだ。どうして平気な顔してるんだよ」

「平気？ どうだろう。そういうの、よくわからない。悲しいとか思うはずなのに、何の感情も浮かんでこない」

視線をぐるりと回し、飛び散る血や息絶えた人々に視線を送り、

最後にまたカイを見つめてナギが笑う。

「おかしいだろ。肉親がこんな風に殺されたのに、オレには涙さえ出てこない」

「馬鹿っ」

ぐいっとカイがナギの背に腕を回す。

嗚咽をあげて泣くカイの背を撫でながら、ナギは扉のところに見える人影を見つめる。

ナギの視線に気付くとふいっとその姿を隠す者に、何の感情も映さない瞳を向け、目を閉じる。

悲しいとも、悔しいとも、思わない。復讐したいとも。

いつか感情が芽生え、自分を突き動かすのだろうか。それともこのまま肉親の死に対し、何も思わないままなのだろうか。

麻痺してしまった心を第三者的に眺めることで、ナギは何とか平静を保とうとしていた。

日暮れを迎える頃、血に染まった衣を脱ぎ捨て、二人は旅支度を整える。

ナギは自室に戻って必要なものを揃えて屋敷の前に立つと、手に持っていた蝋燭を屋敷へと投げる。

チリチリという音が耳に届き、ナギの目的を果たせそうなことを告げている。

全て炎と煙によって消えてしまえばいい。亡くなった者たちの魂も浄化されるように。

そう願ひ、ナギは生まれ育った屋敷に背を向ける。屋敷の門のところでは幼馴染のカイが待っている。

二人にはもう帰る場所はない。

肩を並べ、二人は昨日まで栄華を極めた土地を後にする。

街道に出て徒歩で飛び地へと向かう二人の後ろから足音が響く。

風貌のわりに音を立てずに近寄ってくる姿に、二人は顔を見合わせて頬をほころばせる。

「無事だったか」

「……はい」

一瞬の躊躇いの間に、なんらかの事態があつた事が容易に想像出来る。

「お供させてください、カイ様、ナギ様」

幼い頃から二人のお目付け兼警護をしていた屈強ながら不器用な男は、道のと真ん中で膝を折ろうとし、行きかう人々の視線を集める。

「ゲインがいてくれたら心強い。苦勞を掛けるけどいいかな」

カイがゲインの腕を引っ張り上げながら声を掛けると、ゲインは目を細める。

「もちろんです。どうせ気軽な一人身ですから、こき使つて下さい」
気軽な一人身という言葉に、カイが眉をひそめる。

「家族は」

「逃がしました。妻は西方領の出身ですし、そちらに逃げれば南方領主の手も及ばないでしょう」

「ごめん」

苦渋に満ちた顔で頭を下げるカイの手を、ぎゅっとゲインが握り返す。

「自分が決めたことです。カイ様とナギ様を一生涯お守りすると」
泣き笑いの顔を浮かべるカイの肩をナギがポンッと叩く。

「いつかまたみんなで暮らせるようにすればいい」

「うん。そうだね」

街を守る外壁の外からも見える、公邸の高楼。

昨日まで生活していたその場所を、カイはじーっと見つめる。
いつか戻ってくる。そう、心に誓つて。

どこまでも続くかのように思える街道を、僅か二人の部下を引き連れて南方領主長男カイは北上していく。

彼が目指す「南方領飛び地」は東方領の中にあり、南方領を潤す大河の水源付近にある。

馬を飛ばしても数ヶ月掛かるところを、碌に金も持たないカイは徒歩で行くしかない。

惨めだとか思うより先に、自分の足が悲鳴を上げる。

「靴擦れですね」

街道脇の木陰に座ったカイの足をゲインが持ち上げ、痛む箇所に応急処置を施す。

「靴擦れ？」

「ようは歩きすぎってことだよ。お前が普段歩かないで不精してるからだろ」

カイは痛む足をさするようにながら苦笑いを浮かべるが、そんなカイを腹立たしそうにナギが見つめる。

「いえ、靴が合っていないかったのでしょうか」

「それだけならいいけどな」

ナギは鎖のついた眼鏡を鼻から少し持ち上げるように指で押しながらカイを見つめる。

「軟弱者」

言われたカイはただ笑うだけで、何も言い返そうともしない。

数日前に南方領の公邸を追われてから、カイはほぼ無言を貫き、笑う以外せずにいる。

それがナギの神経を逆なでし、ゲインの心配を余計に煽っているという事は本人は気付いてはいないようだ。

二人のそれぞれの視線にも気付かないようで、ただ赤く捲れ上がった足のかかとを眺めている。

その視界に映るのがごく近くにある足であるにも関わらず、カイはそれよりもずっと遠いどこかを見つめるかのような目をしている。顔は笑っているのに、カイの心は笑ってはいなかった。目を閉じていても、寝ている時も、果ては瞳に違う何かを映している時さえ、彼にはナギの屋敷の血の海が浮かんでいた。

虚ろな瞳を閉じぬまま息絶えた人々の光景が、いついかなる時も心から離れない。

同時に、耳には自分を罵倒し嘲る声が聞こえてくる。

シンシアの。トビの。

耳をふさいでも聞こえてくる声、瞳の裏に焼きついた血の海。

全身の血の気が引くように、肌が粟立っていく。

そんな全てを誤魔化す為にカイは笑う。

そして責められても仕方が無い事だと思っ

た。もしもナギが自分の部下でなかったのなら、巻き込むことも無かったのに。

全て予知していたにも関わらず、その芽を潰そうともしなかった。弟の命と友の命を天秤に掛け、どちらも選べなかった甘い支配者だったのだから。

また、自分の命や手の中にある権力を捨ててまで屈服しようという気も無かった。

決断力の無いカイ自身が招いた災厄なのだから、それは自分の背負わなくてはならない罪だと心に刻み、狂うこともせず平静を保っている。

「バカか、お前は」

ナギが地面に跪き、草の汁で服が汚れることも厭わず、友であるカイの首元を捻り上げるようにする。

服を引っ張られ苦しいはずなのに、カイはまた口元に笑みを浮かべる。

バチン。

ナギがカイの頬を叩き、カイの顔が腫れ、笑顔が崩れる。

「言いたいことがあるなら言え。全部一人で抱え込むな。何のためにオレたちがいるんだ」

痛む頬に触れようとせせず、されるがままのカイは服を引っ張られ、身体を揺すられる。

「一体お前は何を見ているんだ。どうしてオレたちの顔を見ようともしない。どうして一人で殻に籠るんだ。オレを見る」

殴られ横を向いたままだったカイがナギへと視線を向ける。

「いい加減、ガキじゃねえんだから、ふてくされてんのやめろ。みつともねえ」

およそいいところのお坊ちゃまとは思えない口調で、子供の頃は女の子とよく間違えられた風貌を怒りで崩しながらナギがカイを睨みつける。

ゲインはというと、子供の頃からこの二人の遣り取りは見慣れているので、止めようという気はさらさら無い。

止めても無駄。

優雅とさえ評される事のある、長く伸ばした髪や細い身体つきからは想像も付かないような激しい気性を抱え込む直情型のナギ。

よく言えばおおらか、悪く言えばのんびりとしたカイ。

ぶつからないわけが無く、大体がこのようにナギが先にキレるというパターンで、ゲインが止めに入るとどちらの味方だとナギが食って掛かってきて飛び火するだけなので、口を噤むようにしている。

ゲインは二人から少し距離を置き、夕暮れの街道を一望出来るような場所に疲れた旅人を装いつつ腰を下ろす。

周囲に刺客がいるともしれず、さりげなく懐の短剣の柄に手を触れているが。

「お前が失ったもの、大事だったんだろ。今更大事にしなかったって嘆いたって仕方がねえじゃねえか。どうやってやり返すか考えるよ」

「やり返す？」

巧妙に確信をばかしながらもカイに本心を曝け出させようと詰め

寄るナギに対し、カイの表情が泣き笑いのようなくしゃつとした顔に変わる。

「何だ、その顔は。やり返すじゃ不満か。取り返すと言ったほうが適切か」

「いよいよカイの顔が曇る。」

「そんな事、僕は一度も考えた事が無かったよ」

「はあ？」

言われた言葉の意味を反芻する前に、ナギが呆れ声を上げる。

それがカイには自分を責めているように見え、視線をナギから足元の石へと移す。

「これ以上どうやったたら人を巻き込まずにいられるんだろうって、そればかり考えてた。僕が招いてしまった沢山の悲劇を、これ以上広げないようにって」

「おい」

ナギがグイッとカイの肩を掴むと、カイが苦渋に満ちた表情をナギに見せる。

「僕には施政者としての資格が無かったんだと思う。甘かったんだ。ナギの言うように、事前に全ての芽を摘んでしまえば良かったんだよ」

「それは結果論に過ぎないだろ。あの時はそれが最善だと、お前は選んだんだ。可愛かった一人の弟の為に。白日の下に晒してしまえば全てを奪われてしまう弟をお前は見捨てられなかった。それだけの事だ」

「でも、僕の判断ミスでせいでナギの家族を」

一瞬、ぴくりと眉間に皺を寄せるが、フンッと鼻でカイを笑う。

「だから何だ。それはオレと親父が甘かった部分もある。誰がお前に全部背負い込めって言った」

「ナギ」

「んなこと、お前のせいじゃない。まさかここまでやると予測しなかったオレらも悪いんだ」

「だけど、僕がもしあの時……」

「うつせえ。黙れ。それ以上言うつとぶん殴るぞ」

言い捨てると、ナギはカイを力任せに突き飛ばすように離し、はーっと大きく溜息を吐く。「罪悪感を覚えるばかりで、復讐しようとも思わねえのか、お前は。だから腰抜けだとかボンクラだとか言われ放題なんだよ」

ナギの言葉に、カイは自嘲するような笑みを浮かべる。

シンシアが別れ際に言い放った言葉を思い出していた。覇気が無い。その一言に尽きるのだろう。

「そうだね。シンシアもそういうところが嫌だったって言ってたよ」

「はあ？ あんの自意識と脂肪過剰の自惚れ女はお前にそんな事言ったのか」

先ほどまでカイに向けられていた怒りが、ここにはいないシンシアへと向かう。

足元の石を蹴り飛ばし、イライラとした様子でナギが舌打ちをする。

「大体カイの婚約者だからって威張りちらし、その割にはお前の前ではか弱い乙女を演じきって脂ぎった顔に更に油分を供給し、女つてのはこうも醜い生き物かとアイツには嫌というほど教えて貰ったが、最後の最後まで、あのクソ女」

ギリッと奥歯を噛み締めたかと思うと、ナギは自分の歩いてきた道、自分が追い出された場所の方角を見つめる。

「あの女、カイを罵倒するのはオレの専売特許だという事を、いつか思い知らせてやる」

ごほんっとゲインが咳払いをすると、まだ怒り心頭という感じのナギと、苦笑いを浮かべているカイがゲインを方に同時に目を向ける。

性格のまるで違う二人だけれど、いつもどこか同調して動くようなところがある。

そんな二人の様子を見ると、ゲインは対極の二人だからこそ惹か

れあい共にいるのだらうと思う。もつともこれが同じ性格の二人だ
としたら、様々な問題が噴出するだらうから、これでいいのだらう。
「ナギ様。声が大きすぎます」

「……ああ、わかったよ」

低く響くナギの声で頭を冷やされたかのように、ふーっとナギが
溜息を吐き、クールダウンする。

そんなナギとゲインの二人を見ながら、カイがゆっくりと口を開
く。

「多分、おかしいんだと思う」

「何がです」

ナギに代わり、普段口数の少ないゲインが口を開く。

「悔しいとも思わない。取り返したいとも思わない。ナギのように
憤れたら良かったのに、なんとも思わないんだよ」

「何言つて……」

口を開きかけたナギを、ゲインの大きな手が制す。

やっと自分の中に閉じ込めていた感情をカイが出し始めた。ここ
でナギが口を挟んでしまったら、ますますカイは自らの殻の中に籠
ってしまふ。そんな風にゲインには思える。

ナギは肩を竦めて溜息を吐き、手頃な石罫に腰を下ろす。

「本当に欲しいと思つてなかったのかももしれない。富も名声も権力
も。ただなし崩しの手に入れたものに過ぎないんだから。だから
あまり執着してないのかな」

くりつとしたまだ少年のあどけなささえ残るような瞳で見つめて
くるカイに、ゲインは表情を一切変えず見つめ返す。

「あんな無様な追われ方をしたっていうのに、誰かを恨むような気
持ちは全く無い。ただ巻きこんでしまったゲインやナギに申し訳な
く思つ」

自分はあなたの部下だからいいんですよ、なんていう安っぽい気
休めの言葉を口にはせず、ゲインはこくりと一度頷き返す。

「巻き込んでしまった人たち、失われた命に対し、僕は何が出来る

のだろう。ずっとそればかり考えていたよ。嘲る声と血の海が僕を責めるんだ」

「そうでしたか」

昔まだ小さな少年だった頃のように、カイの頭をポンッと撫で、ゲインが膝を折ってカイの顔を覗き込むように見る。

「罪悪感に苛まれ、苦しかったのですね」

「うん」

小さく頷くカイの頭をもう一度ゲインが撫でる。

その様子に呆れたナギがあからさまな溜息を吐くが、主従二人は気付いてはいない。

「お求めの問題の答えは自分もナギ様もお教えできません。それはカイ様が悩み、考え、ご自分の力で導き出すしかないのです」

「うん」

「うんではありませんよ、はいと答えるようにお教えしましたよ」

「はい」

従順に従うカイに目を細め、ナギにも視線を送り、ゲインが沈みかけの夕日を指差す。

「野宿なさるおつもりでしたら結構ですが、そうでないのなら、もう少し頑張りましょうか」

「ああ、わかった」

「そうだね。ごめんね、僕が足を痛めたせいで時間が余計にかかってしまったね」

それぞれの答えを聞き、ゲインは口を噤む。

カイが万事において己を責めてしまうことも、ナギが強気を装うことで平静を保とうとしている事も、ゲインの言葉一つで変えられるとは思わないからだ。

二人を守り続ける事。それだけが万の言葉よりも有益な事であるとゲインは自分を信じている。

立ち上がって痛みを歪めるカイに手を貸し、ナギのどこかほつとしたような溜息を聞き、ゆっくりとゲインはゲインの道を一步

ずつ進みだす。

一月ほど歩くと、三人は東方領の首都への入り口へと辿り着く。飛び地へ行くには遠回りになるが、カイがぜひ見てみたいと言い、立ち寄ることになった。

南方領の首都同様、街の周囲は市壁に覆われ、外部からの侵入を拒んでいる。

市壁の外は手付かずの自然が残り鬱蒼とした森が隣接しているが、門をくぐって中に入ってしまうと、そこは東方領随一の煌く宝石のような賑やかな街である。

門兵に声を掛けられたり怪しまれたりする事も無く、三人は首都の中に入る。

首都の建物は一様に、壁は白で屋根は朱色で統一されている。

「すごいね、これだけ計画的に都市整備するっていうのはなかなか出来る事じゃないよね」

感心しきりといった様子で、目を輝かせながらカイがきよるきよるしながら歩き、ナギもうんうん頷きながら同意している。

「そうだな。東方領は大戦で首都が焼失し、新たにこの街を建設したというから、その際に領主の意向も反映されただろうな」

「やっぱり都市計画は計画的に行わないと雑然としがちだもんね。」

「一から全て作り直すのが効率的なのか、今あるものを再利用するのが良いのか」

「機能的かつ見た目にも優れている都市を作ると言うのは何にしても難しいだろ。作りたいものを作る為には人力が必要なわけだからな」

「そこは権力者の意向だけではなんともいえない問題でもあるね。これだけの人員を新しい都に移すのに、全く民の意向を聞かないっていうわけにもいかないし」

歩きながらも話題は都市計画についてになっている。

二人がいた南方領の首都は戦火の犠牲になったことも無く、人口増と共に街が徐々に広がっていくといった感じで、なかなか権力者の意向が伝わりにくい雑然とした街になっていた。

それと比べると、東方領の首都は内外に誇れる美しい都と言えるだろう。

またきちんと区画整理を行っている事により、失火による被害も最低限に食い止められるようになっていた。

この街と比較すると、かつてカイが実質治めていた街は、非常に稚拙なものに思えてくる。

「すごいね。いつかこんな街づくりが出来たらいいよね」

ふと漏らしたカイの言葉に返答をせず、ナギはゲインに目線を送る。

目線の意味を理解し、ゲインは小さく頷く。

復讐をしたとしても、自分の地位を取り戻したいとも思わなくとも、カイの根本には権力者としての欲があることがその一言で理解出来る。

そのことにカイは気付いていないかもしれない。どうしてここに立ち寄ろうと思ったのかも、本人はあまり意識していないかもしれない。物見遊山程度に考えているだろう。

いつか否が応でも自分の中にある思いに気が付くだろう。その時まで二人は目を瞑り、耳を塞ぎ、気付かないフリを通し続ける。

カイがしたいと思うこと、それは権力者として人心も金も掌握していなくては出来ない事だという事に、人に教えられるのではなく本人が気付かなくては意味が無い。

「そろそろメシにしようぜ。オレ腹減った」

「ああ。そうだね。この辺の名物って何だろう。食べてみたいよね。それこそ旅行の醍醐味だよな」

旅行じゃねえだろとナギは心の中で突っ込むが、口には出さなかった。

「名物料理、お教えいたしましょうか」

慇懃無礼な声を掛けられ、カイは首を傾げながら、ナギは声の主を睨みつけながら、ゲインは腰の剣に手を添えながら振り返る。

カイたちとは全く異なつた民族衣装に身を包んだ一行に、ナギは舌打ちする。

東方領主の甥であり、かつて南方領の公邸で顔を合わせたこともある相手がそこにいたからだ。

「珍しい方をお見かけしたので、つつい声を掛けてしまいました。お邪魔でしたかな」

髭を蓄えた細身の男がニヤニヤと笑みを浮かべながら、頭一つ低いカイの顔を覗き込む。

その下卑た視線に、カイは先ほどまでとは質の違う笑みで微笑みかける。

「こんにちは。わざわざお声を掛けていただきありがとうございます」

人によつては下手に出たようにも感じる挨拶をし、カイはナギを一瞥する。

「僅かな共と東方領の北の飛び地に向かっています」

臣下の礼を取るかのように、ナギとゲインが目を伏せるように少しだけ頭を下げる。

それに気を良くしたのか、東方領主の甥は下品な笑い声をあげる。「そうでしたなあ。貴殿は首都を追われたのでありましたな。まさに都落ちといった風情ですなあ」

ギリつとナギが奥歯を噛み締めて顔を上げようとするのを、カイが片手で制する。

「もうこちらにも話が届いているとは。恥ずかしい限りです」

「本当に恥ずかしいとお思いなら、よくこちらに立ち寄る事が出来ましたな。非常に肝の据わつた方だ」

愚弄する相手に、カイは笑みを讃えたままで切り返す。

「南方領の領地とはいえ、周囲を東方領に囲まれた場所に移るわけですから、東方領がどのようなところか見聞を広げるべきではと思

いまして。ご不快に思われるようでしたら、これにて失礼致します」
「いいえ、どうぞどうぞご覧になれるが良い。我らの都の美しさを。あなたがこれから向かう辺境の荒地などは比べ物にはならないような美しき都でしょう」

意地の悪い言葉にも、カイの表情は変わらない。

「大変学ぶべき点が多く、我が目でこの美しさを見ることが出来た事、非常に良かったと思います。では、行こう」

目礼だけし、カイはナギとゲインに声を掛ける。

ナギの目は怒りに満ちているが、自分が口を出す事ではないと弁えているので無言を貫き、臣下としてカイに付き従う。

踵を返したカイに、くくつと背後から笑い声が届き、まずナギが足を止めて振り返る。

「だから貴殿は腰抜けだと言われるのだ」

自分がせせら笑われたわけではないのに、ナギの怒りは頂点に達しようとしていた。

ぐいつとナギを背後に追いやり、カイが再び東方領主の甥へと視線を向ける。

その瞳には一切の感情が無い。

「弟に地位を追われ、僅かな供しかおらず、薄汚れた衣を身に着け、これが栄華を極めた事実上の南方領主の姿とは思えませんなあ」

カイはその言葉を鼻で笑う。

「南方領主長男は過ぎたるものを持っている。昔よりそう笑われていた地位を返上したに過ぎません」

「腹心の部下を殺され、身一つで追い出されたというのか」
ピクリとカイのこめかみが動く。

「それは僕の力が足り無かったというだけの事。自戒する気持ちはあっても、他者を恨む気持ちはありませんよ」

につこりと笑い、カイが付け足す。

「あなたに対しても、東方領主に対しても、二心を抱いてもおりません」

「は？ こちらを疑っているのか」

目を見開き動揺を浮かべる東方領主の甥に、首を横に振る。

「いいえ。僕が言いたいのは、他者の評価は評価として受け止めるという事だけです。僕が腰抜けと呼ばれるのならば。それはそれで真実ですから仕方ありません」

「カイ様」

ナギが口を開いて何かを言おうとしたのを、カイが首を横に振って制する。口を挟むと言うように。

「気概が無いとか、覇気が足りないとか。まあ僕の評価は領地の中でもそんなものでしたよ。傀儡とまで言われた事もありますよ、部下が優秀なので」

「ご自分をよくご存知だ」

「己を知らなくては、政など出来ませんから。といっても、それを追われた身なので、あまり説得力はありませんね」

クスクス笑い声をあげるカイを、東方領主の甥は憎憎しげに見つめる。

怒らせ、剣を抜かせれば、この目障りな存在を合法的に消せると思っていたのだが、あてが外れた。

暖簾に腕押しとでも言えばいいのか、いかに侮蔑の言葉を並べようと、カイが受け流すだけで全く自分の言葉が響いていない事に苛立ちを感じている。

「では、失礼致します。願わくば今後も友好的な関係が築ければと思っております」

ナギとゲインを従え、カイは門を目指す。

物珍しそうにあちこちを眺めながら、時には露天で食料調達しながら。

背後に殺気を感じつつも、カイはそ知らぬふりをし、この旅を心底楽しんでるかのようになり笑い声をあげる。

その分ゲインは周囲の視線に気を揉んだが。

「お前、バカにされっぱなしで悔しくないのか」

小声で問いかけるナギに、カイはうーんと声を上げて天を仰ぐ。
「そういう感情、どうやらどこかに置いてきちゃったみたいなんだ」
「ほっんとにお前は……バカ過ぎてどうしようもねえよ」
ナギの言葉に、カイは答えない。

南方領主長男カイに過ぎたる物。豪奢な公邸と居並ぶ家臣。

それが真実かどうか、歴史の評価が下るのはまだまだ先のこと。
今、カイのその手の中にはあるのはたった二人の部下だけ。かつて持っていた莫大な資金と優秀な家臣たちを失ったカイは、ナギとゲインがいなければ一介の市井の民と何一つ変わらない。

むしろ職も家も持っていないのだから、庇護してくれる二人がいなければ、生きていく事さえ困難な赤ん坊と変わらないかもしれない。
い。

三月歩いて辿りついたその地に着き、カイは立ち尽くし、ナギは崩れ落ち、ゲインは呆然とした。

「ここが、目指していた場所なのか。」

目の前にそびえ立つように首を伸ばす巨大な「何か」に三人は一様に言葉を失う。

南方領に恵みをもたらす大河の水源。その水源にある湖を見に行ってみようと言ったのはカイだった。

「だって一応神様だから。神様ってどんな姿なのかって気にならない?」

気軽なその言葉に、少し足を伸ばすだけだからと他の二人も従った。

本当に余分に一日歩いただけだ。

途中鬱蒼とした森の木立の間を縫うように、整備されていない獣道のような道を抜け、突然開けた草原のような場所を歩き続けるとそこに辿りついた。

夕闇の中、影しか見えないその生き物はあまりに巨大で、三人は首を知らず知らずのうちに真っ直ぐ上へと伸ばしている。

まるで蛇のようにも見えるし、もしかしたら蜥蜴に胴体が伸びたらこのような姿になるのかもしれない。

なんとも形容しがたい「生き物」に、絶句して立ち尽くすしか無い。

あれは何だとか、あれが神なのかとかといった疑問も、口に出す事さえ無く、魅入られたように三人はその姿を見上げ続ける。

ゆつくりと日が沈んでいき、空の茜色と、巨大な生き物の薄暗い体色の対比が濃くなっていく。

カイは真っ直ぐにそれを見つめる。

これが神なのか。

恵みも災厄も全てもたらす、絶対の存在。

縫い付けられたように足は動かないけれど、カイの頭の中には様々な事柄が浮かんで消える。大河の氾濫により、呑まれた家、人嘆き悲しむ声。氾濫によってもたらされた肥沃な土地に実る黄金色の食物。

全ては目の前のこの生き物が……。

今まで神などというものを信じた事も無かったし、信じようとも思わなかった。しかし、これは。

ゆつくりとカイの片手が彼の口元を覆う。

何かを吐き出しそうになり、その何かを押しとどめたかのように。それは感嘆の声だったかもしれない。

呆然としていると、ゆつくりと爬虫類のような特性を持つ生き物は、その体の向きを変えカイたち三人のほうへと首を回す。

金色の瞳と視線が合い、ああ、食われるんだなとカイは思う。

理性で考えて辿りついたわけではなく、その瞳を見た瞬間に理解した。

弟や父の愛人の一人に地位も領地も追われ、三ヶ月にも及ぶ旅の末に神に食われるのか。

ふいにカイは生き物から視線を逸らして首を曲げる。

待てよ。この神は数年前の祭で生贄を喰らったのではなかったか。日常的に人を食うとは聞いてはいないな。

思い直し、カイはじつと生き物の目を覗き込む。

一体何を考えているのだろう。何を思っ自分たちを見つめているのだろう。人が珍しいのか。それとも招かれざる客に憤りを感じているのか。

生理的な恐怖を感じていないわけではない。握り締めた拳は震えているし、自然と掌に爪が食い込んでいく。

けれど目を逸らしたら負けのような気がして、カイはそれから目を離さずに見つめ続ける。

その間に徐々に空の色は闇の色へと姿を変えていく。

だからなんだと言うのだ。夜になつたとしても、この生き物から目を離してはいけない。カイは何故かそのように思えて一歩も動かずにいる。

ナギとゲインはというと、最初こそ神と呼ばれし生き物へ目を向けていたが、早々に踵を返したくなり体の向きを変えている。

神への畏怖なのか、異なつた種への恐怖なのか、出来る事ならば足早にこの場所を去りたいと思つた。二人はぞくぞくとする寒気を覚え、顔は青褪めている。

それなのにカイは一向に動こうともしない。

しかし声を掛けて生き物との間の均衡が崩れてしまうと、カイの身に危険が及ぶのではないかという気もして、二人は動く事さえ躊躇われた。

この時間が早く過ぎてしまえばいいと思つているのに、二人には永遠にも似た長さを感じる。

止め処ない恐怖と戦つてしていると、ふつと生き物の視線が逸れる。

それでも三人の緊張の糸は張り詰めたまま変わらない。

何故視線を逸らしたのかと、カイは生き物の視線を追う。

その先に何があるのか、宵闇の中では確認する事は叶わない。

ピクリと生き物が耳らしきものを揺らし、ゆつたりと体の向きを変えてカイたちには興味が無いといった様子で湖の中に体を沈めていく。

ザバンと波打つ音が起き、ブクブクブクという音が、ブクブクという軽い音になり、ついに生き物は姿を消す。

それでも暫く動けずにいたが、月が空に昇るほんの手前で、三人はふーっと大きく息を吐き、緊張の糸が解れる。

脱力しきつてその場に座り込んだナギとゲインに、カイが手を差し伸べる。

「行こう。さっきのが戻ってくる前に」

「あ、ああ」

ナギが慌てた様子で荷物を持ち、ゲインも三人の中で一番大きな

彼の荷物を背負いなおす。

ほうほうの体で退散する二人の部下の後を、ゆっくりとカイが追う。

「早くしろっ」

ナギに声を掛けられ、立ち止まり振り返っていたカイが「うーん」と気の無い返事をする。

目を凝らしても、今は僅かに湖畔の水が見える程度で、先ほどの生き物はどこにも見えない。

「あれは、一体何なんだろう」

その疑問に、誰も正確に答えることは出来ない。

湖から離れた場所で野宿し、翌日には本来の目的地の飛び地の執政官が住む街へと辿りつく。

執政官は、現在はいない。

もう何年も前に現役を引退し、それ以降この地に補充の役人さえ送られることが無い、いわば南方領にとってどうでもいい場所なのだ。

東方領の中にあるが、特殊な生き物が生息しているせいもあり、誰もこの一帯には近寄ろうともしない。

かつての東方領主が軍を率いて南方領飛び地を自領とすべく侵攻してきたこともあったが、悪天候とそれによる飛び地との間を繋ぐ橋の崩落により諦めざるを得なかった。

勿論一度二度で止めた訳ではない。

幾度と無く繰り返し返したし、何人もの領主が試みたが、成功した者はいなかった。

しかし南方領にとってこの地が非常に軍事的にも政治的にも重要かといえ、たまたま領土を持っている程度で興味は低かった。

というのも、大河の上流に位置することもあり、非常に大河の影響を受けやすく、農業に相応しい場所と言いがたく税収はあまり望

めない。

更に東方領を抜けなくては南方領との遣り取りが出来ないこともあり、領主の意向が伝わりにくく、軍事上の拠点にしようにも物資の搬入さえ東方領主の手前困難であった。

故に、名目上は南方領の領地だが、どちらかというところと自由自治地区のように扱われている。

そこに「事実上の南方領主」とさえ呼ばれたことのある領主の長男が赴任してきた。

何が変わるのか、住みにくくなるのではと懸念した住民たちは、カイ一行の到着を息を潜めて見守っていた。決して目立つ事は無く物陰からこっそりと、カイがどのような人物なのかを見極める為にカイたちとはというと、迎えも無く、廃屋と言っては言いすぎだが、とてもとても飛び地の執政官の住居としてはお粗末過ぎる掘っ立て小屋を前に絶句した。

ある意味、あの生き物と対峙した時よりも啞然としたかもしれない。

前日とは違う意味で、三人は言葉を失った。

明らかに穴の開いた屋根、斜めに傾いている柱。非常に風通しのよさそうな穴の開いた窓。

「これ、何階建て？」

外から見て、構造上窓の上に窓があるように見えるので、思った疑問をカイが口にすると、ナギは「一」と溜息をつきながら頭を垂れる。

「知るか」

投げやりなナギの言葉に、カイは俯いて何やら指折り数え始める。じとーっと横目でその様子を見つめ、ナギはもう一度溜息を吐く。「何階建てかなんて考えたって意味ねえぞ。どう見たってこれ住めねえだろ」

計算するのを止め、カイがちらりとナギのほうに視線を向ける。

「そうじゃなくて、何日あれば家がこんな風に朽ち果てるのか数え

ていたんだ」

「っんな、どーでもいい、くっだらねーことに余計な労力払うな」

見た目とは対極的な重低音でカイを威嚇するが、カイはどこ吹く風で口元に笑みを浮かべる。

「余計な事かな。そうかな？　これがもしすぐ短期間でこんな廃屋になったのなら、僕たちは歓迎されていないって事だし、それを非常に強く僕たちに訴えたいってことだよな」

「つとに、お前は」

これ見よがしに溜息を吐くナギを無視して目を瞑り、暫く考えるようにしてからカイが目を開き、ちよつと待っていてねと二人に言つて建物に近付く。

止めようかという意欲がわかないわけではないけれど、どうせ聞きやしないとナギはカイのしたいようにさせる。

ゲインはカイの身に差し迫った危険があるとも思えなかつたので、周囲に目を配る事を優先させる。何故なら扉は外れ、建物の中は見通しが良く、とてもカイを害しようと思うものが潜むには不適切に見えるからだ。どちらかというと非常に豊かな緑が刺客が身を潜めるには適当に見える。

建物の前に立ち、カイは屋根を見上げる。

そんなに大きな建物じゃないな、公邸や私邸と比べるまでも無いが、豪族の屋敷のほうがこの何倍も大きい。少し余裕のある商人の家よりもまだ小ぶりだ。

分析しながら見つめ、それに飽きるとひょいっと中に足を踏み込む。

一步踏み込んで、それから足を上げると、カイの足跡が建物の中にくっつきりとつく。

それは先ほどカイが言った可能性が否定された事になる。

伝令や早馬で僕が来ることが伝えられたとして、それから僕が着くまでの間に壊したとしても、ここまで土埃が溜まつたりしない。

ポンつと手頃の柱に手を押し当て、そこに体重を乗せつつカイは荒れ果てた室内を見る。

略奪されたわけでもないだろうにこれといった目ぼしい調度品も無ければ、日用品も無い。本当にここは捨てられた建物だ。捨てられたのは、必要が無いから。

何故必要が無いかといえば、この地を南方領主が意識的に領土として統治する意思が無かったから。

執政官を送った事もあったから、きちんと他の建物に比べたら背の高い大きな館を建てたのだろうに、それは機能しなかったということか。

シャンデリアであったであろう蜘蛛の巣を眺め、カイはうーんと唸る。

さしあたって、今日からどうやって生活していけばいいんだ。ここに来れば、少なくとも生活に困る事は無いだろうと思っていたのに。

追い出された時から解決せずに先送りになっていた問題にぶち当たったカイに出来る事はといえば、埃で真っ白になった手を払うくらいなものだ。

「困ったね、これは」

呟き、ぎしつと軋む音を立てる建物の中を床板を踏み抜かないように慎重に歩を進めるカイの姿は、ナギとゲインの視界から消える。遠巻きに見つめていたゲインがぐつと片足を踏み込んだ瞬間、ナギがその肩に手を掛けて動きを制する。

「ナギ様」

最小限の動きでゲインを足止めしたナギは首を小さく左右に振る。「ほっとけ。どうせ止めたって聞きやしない。お前も無駄な労力を払う必要は無い」

「しかし」

「怪我をしたらそれで少しは慎重になるという事をアイツも覚えるだろ。それよりもこの先どうするか考えねえと」

「……はい」

もう一人の主人ナギの言葉に、ゲインは眉間に皺を寄せる。ここに来さえすれば。昨日までの楽観的過ぎる自分の横っ面を一発殴り飛ばしたい気分だった。追放されたという事の意味を、真に捉えていなかった。

支配者である二人の主人は、その日の食事や寝床を心配するといふ経験は無い。

無尽蔵とも思える財産、それよりも何よりも権力という庇護のもと、大切に大切に守られていたからだ。

だが今の二人にあるのは、多少人より腕が立つという事しか自慢できるところが無い自分が一人いるだけだ。

今三人にある僅かな資金も、元はナギの家の資産であり、それをほんの少し拝借した程度しか持つていない。つまり、ここに辿り着くまでの間、三人が食いつなげれば良いという程度の僅かは資金しか持つてはいない。

しかも当初の予定よりも到着まで時間が掛かっている。ナギは何も言わないが、金子が尽きるのも時間の問題だろう。

カイ様はどう思っただらうか。

崩れ落ちそうな廃屋に足を踏み込んだまま戻ってこないカイへと視線を向ける。

「困ったな」

溜息交じりに、計らずもカイと同じ言葉をナギが吐き出す。

手頃な木に寄りかかり腕を組み、視線はカイのいる場所から外さないままナギは不貞腐れたような仏頂面で空を仰ぐ。

「ナギ様？」

控え目なゲインの問いかけに、ナギはふんつと鼻を鳴らす。

「悩んだところで答えなんて出てこねえ。浅はかなオレは、税金つてのは勝手に入ってくるもんだと思っただけだし、為政者つてのは無条件に崇め奉られるものだと思っただけだから」

眉をひそめたゲインの事など気にせず、ナギは大きく息を吐く。

「答えなんてねえよ。オレは、いや違うな。オレには責任なんてねえんだ。全部アイツが背負い込んでるんだからな」

長い髪を掻き揚げ、懐から煙草を取り出してナギが口に啜える。

「試されているのはオレなのか、カイなのか。それともオレたち三人なのか」

そこまで言うと、ナギは鼻で笑う。それ以上の言葉を口にする事は止めたようだ。

盛大な独り言を横で聞き、ゲインは思う。試されているのは、多分、カイなのだ。領主の長男で、この地の政をまかされたのはカイなのだから。

ナギには申し訳ないが、ナギもゲインもカイの添え物でしかない。今にカイを守り立てるかという事がゲインにもたらされた使命であり、ナギの使命はカイを補佐する事。

すべてを生み出すのはカイでなくては出来ない。何故ならば、すべての評価はカイへ下るからだ。

事実上の南方領主。南方領主の長男。

そのカイが今何を為せるのか。まずはこの飛び地という名の小さな場所で試されている。権力と財力という両翼をもがれたカイに何が出来るとのこと。

そんなカイは興味深そうに屋敷の中を歩き回っている。

彼はこの飛び地に関する資料が残されていないかと、それだけを求めて彷徨っている。

かつてこの屋敷に住んでいた執政官が何も残さずにいたとは思えない。

少なくとも人口がわからなくては税を取り立てる事も出来ない。

という事は、戸籍があるに違いない。それによって、この地の構成が少しわかるかもしれない。

何よりも、歴代の執政官たちがどのようにしてこの地を治めていたのかが知りたかった。

脳裏にはあの巨大な生き物の姿が浮かぶ。

知らず知らず鳥肌が立つのを押さえこみ、目の前に垂れ下がっている蜘蛛の巣を払う。

「どうやって、あんなモノと共存しているんだ。」

爬虫類独特の瞳を持つあの巨大なモノ。思い出しただけでも身震いが止まらない。

同時に指に掛かる鬱陶しいほどの蜘蛛の巣に苛立ちを感じていた。飄々としていると評される彼ではあるが、別に感情が無い訳ではない。この手ごたえのまるで無い探索に焦りを感じてもいた。

何も判らない。資料さえも見つけられない。

与えられるのが当然であった彼は、探索さえも止め、その場に立ち尽くしてしまう。

「どうしたらいい。何を僕に求めているんだ。そう、問える相手もいない。」

いつそこの地に来るなと罵倒された方が、どれほど楽だっただろう。姿が見え、言葉を話すことが出来れば、そこから何かしら打開する事も出来るかもしれない。

しかしここには誰もいない。過去の痕跡は見事なまでに消し去られている。

それが意図的だったのか、はたまた偶然の産物の積み重ねでこのような事になったのか。

事実上の南方領主として政に遺憾なくその才能を發揮していたカイは、その評価が正しくない事を身を持って知る。

「僕は無力だ」

カイは父の庇護無しでは何一つ為していなかったのだと、痛いほどに感じた。

抜けるような青空が垣間見える天井を見上げ、彼は嘆息を漏らす。ここに来れば、何かが変わるのだと思っていた。いや、規模は違うものの今までと同じように公権力を發揮して飛び地を治めるのだと思っていた。

しかし実際には廃屋一つが、彼の財産。

ここで威張り散らしたって道化のようには見え、滑稽だ。

「今日の寝床も、明日の食事も、全て執政官という地位が与えられるものだと思ひ込んでいたんだ」

髪も服も蜘蛛の巣と埃で真っ白になったまま、崩れ落ちそうな屋敷の中、カイはかつての自分を思い起こしていた。

朝起きれば誰かが綺麗に洗濯されて糊付けされた上質な服を用意してくれ、顔や体を洗い清める為に温かい湯を用意してくれる。身を清めたら、温かい食事が用意されている。仕事から戻れば、ゆっくりと体を休める為の寝床が用意されている。

その全ては「南方領主の息子」に与えられたものであって、カイ個人に対して与えられたものではない。

「流罪って、こういう事だったんだ」

全てを与えられている者から、全てを奪う事。丸裸で放り出されるという事。

三ヶ月という月日を経て、やっとカイはそのことを自らの身をもつて理解した。

見回しても木立しか見えない小さな草むらの中にある、元は執政官の館だった廃屋。

その中で歩き回るカイを、呆れ顔で見つめたままナギは右の親指の爪を噛む。何か考え事を始めると出てしまう癖だ。

視界を巡らし、恐らく、いや確実に南方領の首都から張り付いている領主の手の者がどこにいるかを探る。相手も素人ではないので、その姿を容易に確認する事は出来ない。

なんだかどん臭そうな一団が木立の向こうで固まっているのが見えるが、その連中は恐らくこの辺りの村の人間だろう。気にするほどの事でもない。

必要なのは黒幕たちの手先だが、あっさりと見つかってくれて、こちらの思惑通りの事を吐き出すとも思えないので、ナギは別のことに頭を使う事にする。

さしあたっては、今日からの根城をどこにするかという問題がある。

目の前の恐らく3階建てだったのであろう廃屋は、とても雨風さえ凌げるようには思えない。

何でこんなものにカイが固執してわざわざ探索に出たのか、ナギには想像もつかなかった。それよりもっと効率的に、飛び地の権力者を探すとか監視役の人間をとっ捕まえるだとかしたほうがいいのではないかと思う。

ナギにとっては無駄な時間。

それでもカイにとっては必要な時間であったようで、呆れ顔のナギと神経を張り巡らせているゲインが飽きる程度の時間はゆうに過ぎた。

欠伸を一つ。

白魚のような指と評された事もある、本当に女性のような綺麗な

指で口を覆った後、ナギはその指で目をごしごしと擦る。自然と涙があふれ出てきてしまったからだ。

決して悲しいとか思ってた流した涙ではないのに、ゲインに慮るような表情をされ、ナギは眉間に皺を寄せる。

「眠いからだ」

「お疲れですか」

ゲインはナギを窺うように問いかけ、その姿を観察する。

貴公子だとか、美少年だとか、人形のようなだとか、ナギを形容するのはその内面とは間逆の言葉である事が多い。

煌くような漆黒の長い髪。男性としては細腰で、華奢と言っても過言ではないような体格。目つきの鋭さと、どこと無く他人を撥ね退けるような雰囲気が無ければ、変声期を迎えるまでは、まるで少女のようだった。

領主の息子として軍事面での活躍も期待されていたカイとは違い、家系も元々内政を担当する宰相を多く輩出しており、武術とはかけ離れた生活をしてきた。

カイの靴擦れをナギが笑ったが、実際にはカイの日頃の運動量よりもはるかにナギの運動量のほうが少ないだろう。本人の言葉を借りれば、鍛え方が足りないということになる。

そんなナギは、ゲインから見るとだが三ヶ月の間に痩せたり、逆に太ったりという事は無いように見える。

血色も良く、眼光もいつもものように鋭い。

だが、どことなく何かが違う。その何かが何なのか、ゲインにはわからない。

「別に疲れていない。飽きただけだ」

言い放つと、ナギは手頃な木に寄りかかってカイを見つめる。

背後を敵に取られるという危険など一切考えてはいないようで、

その分ゲインの神経は磨り減るが、ナギにはあまり関係ないようだ。

実際、この場で殺されるとしても自分ではないだろうとナギは思っている。狙われているのはカイだ。

カイだけが、この三人の中で南方領主の血を引いているのだから。ナギの苛立ちもゲインの気苦労も知らず、真っ白に汚れて廃屋から出てきたカイにナギは盛大な溜息を吐いた。

こいつ、一体何やっていたんだ。そんな言葉が口にしなくても伝わってくるような、呆れきった顔でカイを見つめる。

事実、ナギの心中はそんなところだった。

権力を奪われて一役人として辺境に飛ばされ、与えられたのは廃屋一つ。それに憤る事も無く、探索を終えて飄々とした顔つきで戻ってくる。己の汚れなど一切気にしていない素振りだ。

ずっと腹の内に抱え込んでいたドロドロとした熱い、吐き出して叩きつけてしまわなくてはすっきりしない何かがどんどん成長していき、それはカイへと向けられる。

「ほっんとにお前はわけわかんねえ」

考えるよりも先に、口が言葉を紡ぎだす。

そんなナギの様子を気にする風でもなく、カイはゲインに声を掛ける。

カイにとってはナギに感情をぶつけられるのは日常茶飯事だったので、それを受け止めるよりも受け流す事に慣れてしまっている。

「本当の事を知りたいから、その辺で窺っているの、適当に見繕って捕まえてきて」

「畏まりました」

目礼だけでカイの指示を受け取り、ぐっと踵を返してゲインは周囲を取り囲む森の中に視界を巡らせ、そして気配のするほうへゆっくりと足を向ける。

その様子を横目で見ると、カイはポンポンと肩の埃を払う。

すっかり無視された格好のナギは、感情の赴くままにカイの腕を殴るように掴みかかる。

「少しは人の話を聞け」

腕を掴まれたまま身じろぎもせず、カイは真っ直ぐにナギを見つめて首を傾げる。

「どうしたの」

「どうしたのじゃねえ。何でそんなに平然としてられんだよ」

憤るナギを、カイはうつすらと笑みを浮かべて受け止める。それが余計にナギの神経を逆撫でしていることに気付いてか、無意識か「慌ててもしょうがないよ。今日の前にある事実は事実。そこから何を掴み取るかが大事なんじゃないかな」

ふいつと首を廃屋へと向け、そしてカイは溜息を一つ吐く。

「僕に求められているのは何なんだろう。僕は一体何をしたらいいんだろう」

決してナギに答えを求めたわけではなく、まるで自分自身に問かけるように呟くと、カイはナギへと顔を向ける。

「ナギはどうしたい？」

問われたナギは一瞬答えに詰まる。

「別に、オレがどうしたいかなんて関係ないだろ」

「そうかな。そんな事はないと思うよ」

雲を掴むような抽象的な会話は、ナギを余計に腹立たせるだけだった。けれど足元の小石を蹴るくらいのことしか、ナギには出来ない。

何を言っても無駄。このふわふわしてぼんやりとしていて、その実は芯の強いカイには。

「違うな。俺がどうしたいかなんて関係ねえ。お前がどうしたいかだ。オレはその為にお前の傍にいらんだろ」

じーっとナギを見つめて言葉を聞いていたカイが、ふわっと表情を崩す。

そして自分の歩いてきた方向を見つめる。それはかつてカイが君臨していた南方領のある方角。

「そんなしがらみ、疾うの昔に置いてきたんじゃないかな。僕は対等な関係で聞いているんだ。ナギがどうしたいのか」

「どうしたいかだと」

「うん。ナギは僕とは違う。僕は自分の椅子を奪われただけに過ぎ

ない。けれどナギは家族や屋敷、全てを奪われた。平静を保っているけれど、本音はどこにあるの」

木々のざわめきが、二人の間に風を運んでいく。

ふわりとカイの柔らかな色素の薄い髪を風が撫でていき、ナギの漆黒の長い髪を乱していく。

「皮肉な事に、僕は父も母も血を分けた兄弟もみな健在だよ。けれどナギは肉親を皆殺しにされ、その手で弔いの火を屋敷に放った。ねえ、ナギ。僕といっても、望むような復讐は出来ないかもしれないよ」

「……復讐、だと」

自然とナギの声が裏返る。

一見すると穏やかに話している二人の間に、見えない火花が散っている。視線だけで殺せそうな位の鋭さを放つナギに対し、カイはどこまでも飄々としているが。

「残念だけれど、僕は僕の椅子を取り返したいと思っていない。あれは弟にくれてやっても構わないと思っている。ここへ来るまでの間の三ヶ月。ずっと考えていた。僕は何がしたいのだろう、とね」

「答えは見つかったのか」

ふつとカイが鼻で笑う。

「いいや。何も」

「だからオレに答えを求めるのか。それは筋が違っだろう」

「違わなくない。僕は僕の道に行く。だからナギはナギの、ゲインはゲインの道を進んだらいい。これ以上、二人を巻き込みたくないんだ」

何がしたいか、何をさせたいか。空を仰ぎ、ナギは大きく息を吐く。

いつかカイはその目に血の海が焼きついていると言っていた。それは自分も変わらない。しかもその血は自分と同じ血を持つ者のもの。

あの日、全ての感情が麻痺したようになり、涙も出ず、淡々と自

分の為すべき事をこなした。せめて父母や弟妹の遺体が汚されぬよう、屋敷が荒らされる事の無いようにと願って。

けれど体を蝕んでいくのはいよいよの無い苛立ち。何故オレの家族だけがこんな目に合わされるのか。こんな理不尽な事、あっていいのか。

この飛び地への道程も決して平坦なものではなく、柔らかなベツドに身を横たえる事も出来ず、星空の下眠ったこともある。

濡れ衣で、罪人でもないのに、このような仕打ちを受けるのは何故だ。

自問自答しなかった日は無い。

そして、己の甘さを呪った。この謀略の一端を掴んだ時に、消してしまえば良かったのだ。カイの愚弟など。

カイの意見など伺わず、謀反の罪で幽閉でも何でもしてしまえばよかった。たとえ領主が溺愛していようが何だろうが。

後悔とそれから憤り。二つの感情の狭間で、ナギは揺れ続けている。

後からじわりじわりと浸食していく強い感情は、飄々とこの事態を受け止めているカイへと向かう。

全部お前のせいだ。そう言えればどんなに楽だっただろう。けれど、賢明なナギはそれを口にする事は躊躇われ、握り締めた拳をカイの腹へと一発入れるだけに留める。

痛みに顔を顰めるカイに、ナギは感情を押し殺した低い声で囁くように吐き出す。

「今更ここからどうやって帰れって言っただ、ボケがっ」

十分に巻き込まれている。それは口にしなければもカイには十二分に伝わっている。

「ごめんね」

短い謝罪に、今度はナギが力一杯頭を叩く。

「あほか。そんなもんは、いらねえんだよ、バーカ」

今にも泣き出しそうな笑い顔で、自分の頭を撫でたカイは、ガサ

つという音がしたほうへと視線を向ける。

そこにはゲインとゲインに連れて来られた、とても鍛えられた兵には見えないような情けない面持ちの、恐らくこの辺りの住人と思われる腰の低そうな頭の薄い痩せた男がいる。

首根っこを掴まれ、男はここまで引き摺ってこられたようだ。

無表情のまま、ゲインはカイとナギの前に男を突き出す。

「一番足の遅いのを捕まえました」

男はしかめっ面のゲイン、薄笑いを浮かべているカイ、ふんと憤りを鼻息だけで表現して自分を見ようとしてもしないナギの三人の顔を見比べる。

暫くそうしていたかと思うと、おもむろにナギの前で両手を擦り合わせるようにして合わせ、頭を下げる。

「りよ、領主様」

声を掛けられたナギは不快感丸出しの顔をし、カイは目を丸くし、ゲインは咳払いをする。

「べ、別におらたちは新しい領主様のことを追い出そうとしたりしたわけじゃなくて、領主様ご一行を見たら、ここに来るように伝えるって兵隊さんたちに言われたから」

男を見下ろしていたナギがカイに視線を送ると、カイはその視線を受けて木立の方に目を向ける。

こちらを窺うように、何人もの人影が見える。中には顔をこちらに出しているものさえいる。

とても鍛えられた兵でも隠密行動をしている者にも見え、純粋にこの男を心配している住人たちのだろう。

「じゃあ、みんなで成り行きを見守っていたってことなのかな」
穏やかなカイの口調に、男は何度も壊れた人形のように頷く。

「わかってくれて、ありがたてえ。領主様、怒ってないですか」
その声が問うのはカイではなくナギなので、カイは何も言わずに面白そうな顔をしたままナギを見つめる。

ナギは心底面倒くさいといった面持ちで、男を見下ろす。

「オレは領主なんかじゃない。領主っていうのは首都にいる南方領主ただ一人だろ」

「いやいやいやいや。この辺り一体の一応南方領って事になっている場所を治める方を、昔から領主様って呼びしているのです」

「だーかーら、オレは……」

ナギの口を手で押さえ、カイがその後に続く言葉を塞ぐ。

カイはにっこりと無害と見せかける笑顔を向けて、木立の方へと声を掛ける。

「出てきて大丈夫ですよ。僕たちは何もしませんから安心して下さい」

そんな言葉で出てくるはずもないと男は思ったが、何故かぞろぞろと大挙して三人の動向を見守っていた住人たちが出てきた。その中には腰が、くの字に曲がった老人もいる。

反射的に、カイはその人物こそがこの騒動の中心人物であろうと思った。

わざわざ杖を突いてまで森の中に身を潜めていたという事は、その目で事実を確かめようとしたからに違いないし、他の住人たちも老人に氣遣うような視線を向けている。

恐らくカイの判断は当たっている。

ナギの口に当たっていた手を離し、耳元で「擬装しておこう」と囁く。

その言葉にナギは溜息を吐きだし、そっぽを向いてしまう。

ナギを新しい領主（彼らが言うにはだが）と誤解させておき、まずは出方を見よう。一体どの手の者がこの善良そうな住人たちに力イたちを騙すように言ったのか。それを正確に知るためにも。

もしも今回の謀略の主犯から送られた兵ならば、正確にカイの特徴を伝えているに違いない。それなのに誤解しているというのか、それとも別の者が彼らに命令をしているのか。

ぞろぞろと二十人ばかりがカイら三人の周りに集まると、中央にいる老人が曲がった腰を更に曲げて頭を下げる。

「南方領主様のご長男であらせられるお方で宜しいのですね」

先ほどの男のような訛りや独特のイントネーションも無い流暢な言葉が、老人の口から流れ出していき、そっぽを向いたままのナギに変わってカイが首を縦に振る。

実際にはカイが南方領主の長男なのだから、間違っではないのだが。

「あなたは？」

「この辺りの三つの村の長をしております爺でございます」

「お名前は」

「は？」

「僕があなたを呼ぶのに、長とお呼びすればいいですか、それともお爺様とお呼び致しますでしょうか。それともお名前で呼ぶのがよろしいですか」

お爺様と言った時に、群集から忍び笑いが漏れる。村人たちに緊張感はどことなくあるようで無いようだ。

老人は首をゆっくりと横に振る。

「長で構いません。名前などお耳に入れる必要はございません」

「そうですね。長、では唐突ですが、本題に入らせて頂いて構いませんか」

切り出したカイの口調の柔らかさとは対照的に、長の表情はキリッと引き締まる。しかし緊張が顔に表れてしまうようで、ぴくぴくと口角が小さく動いている。

「今回のこのイタズラは、どなたの策なのでしょう」

「そ、それは……」

「ああ、決して責めているわけではありませんよ。あなた方のような善良な一市民が今回のこのようなことを自主的になさるはずがない。どなたかに脅されているのではないかと少々心配になっただけです」

「はあ」

「このような形で、企みが露見してしまったのですから、ここにい

る皆さんへの何らかの懲罰、少なくとも叱責はあるのではないかと
思うのですが、いかがでしょうか」

やんわりと追い詰めていくカイの言葉に、長は顔を真っ青にして
しまう。

ナギはそっぽを向いたまま考えを巡らせている。一体何がしたい
のだろう。カイの本心が見えない。

ギリっと爪を噛み締める。

この非常に可愛らしいと言わざるを得ないような計略を裏で操る
人物が誰か知りたいのだろうという表面的なことはわかるが、そう
ではないカイの心中がわからない。

何をしたいかも見つからない。決して自分の「椅子」を取り戻そ
うとも思っていない。

ではなぜ、自らの身分を隠した上で住人たちと向かい合い、脅し、
この南方領飛び地を手に入れようと動き出したのか。

端的に言ってしまうえば、カイが何をしたいのか、その根本がわか
らない。

流されて生きてきて、事実上の南方領主と呼ばれる程の権力を手
にしていたとカイは言うだろう。真に流されて生きてきたのならば、
そのように内外において呼ばれることは無かったのではないだろう
か。

東方領主の親戚にカイ自身が言っていたが、傀儡と呼ばれるのが
せいぜいだったはずだ。

それなのにカイは少なくとも周囲の臣下の者たちには絶対の権力
者と認めさせていた。

ここにカイの矛盾がある。

本当は権力を望んでいたのではないだろうか。もしくは権力があ
ることによって為す事が出来る様々な事を、意欲的に行っていたの
ではないだろうか。

だからこそ、ここでもまた権力を欲するのではないか。

しかし、カイ自身はそのことには気付いていないのだろう。

それにこれはナギの推測でしかなく、カイの本音は全く別のところにあるのかもしれない。

例えば、今日からの寝食が十分に整えばいいだけなのかもしれない。

「一つお伺いしてもよろしいですか」

沈黙を貫いている長に対し、カイが何かを閃いたような顔をする。「あなた方は僕たちに何を求めているのでしょうか。この地から出て行くことですか。それともこの領地を治めることですか」

はっとした表情で顔を上げると、長は深く溜息を吐く。

ぼそりぼそりと、静かな口調で決してカイとは目を合わせずに咳くように話し出す。

「わしらは領主様を選ぶ事は出来ません。ですから領主様がここにいるというのなら、それをお止めする事は出来ません」

首を軽く傾げ、カイは長とその後ろにいる住人たちに笑みを向ける。

「でも、困る人がいるんですね。あなた方はそれに逆らえない。そういう事でよろしいのですね」

「……はい」

カイは満面の笑みを住人たちに向ける。

その笑顔に住人たちはあっけにとられたように、一様にぽかんと口を開けたままカイを見つめる。

「ありがとうございます。色々話しくいこともあったでしょうに」
一番傍でその笑顔を見た長は、はあと生返事を返す事しか出来ず、カイの笑顔を見つめ返す事しか出来ない。

ふふつと声を上げて笑ったかと思うと、次の瞬間、ナギに視線を投げる。

「どうする？ とりあえず寝床くらいは用意してもらおう？」

「……そうしてくれ。もう野宿は勘弁だ」

「というわけですので、大変申し訳ありませんが、あの館では雨風さえ凌げそうにありませんので、空き家で結構ですので、一軒お借

りできますか」

「えっ。あ。そんなのでよければ」

弾かれたように答える長に、にっこりというよりはニヤリというような微笑を浮かべ、カイはゲインに声を掛ける。

「じゃあゲイン。場所がわかり次第、もう片方のも捕まえてきてくれるかな」

「畏まりました」

膝を折って答えるゲインから視線を逸らし、木立の中に目を向ける。

「ほーら、あそこで気になって気になってしょうがないみたいだからね」

一方的に話しているカイと、ぶすつとした表情のナギを見比べ、新しい領主一行が想像と全く違う事に驚き、住人たちは狐につままれたような表情になった。

何故自分たちが全く責められないのか。本当に目の前にいるのは南方領主の長男なんて偉い人なんだろうかと懐疑的になっていた。

住人の思惑をよそに、南方領を追い払われてから三月と二十四日。やっとカイたちは根城というには粗末ではあるが、拠点となる場所を得る事が出来た。

ゲインが森へ一歩踏み込もうと体を沈みこませたまさにその瞬間、カイはすつとゲインの前に手を差し出す。

動きを制するかのような動きに、眉を寄せてゲインがカイの顔を見つめる。予定変更ですかとでも言いたげに。

「僕の剣、置いていって」

その言葉にニヤリとゲインが笑う。

「畏まりました。ナギ様の分は？」

「いらぬよ。どうせ荷物になるだけだから」

カイの返答を聞くと、ゲインは頬に笑みを讃えて背中に背負った3本の剣のうちの2本をカイへと手渡す。

ゲインの腰に下がるものよりもずつと細身の剣を2本、カイが左の腰のベルトに差し込むのを確認すると、ゲインは擬装しているとはいえ彼の真の主人であるカイに対し目礼をする。

「御武運を」

「うん」

背中でのその声を聞くと、カイは煌びやかな装飾が施されている鞘に収められている剣を、すつと目の前に引き抜く。刀身は鍛え抜かれ、陽光をキラキラと反射している。

その行動に恐怖心を煽られたのは住人たちで、いよいよ新しい領主様に裁きを受ける時がきたのかと、青褪め、震え、お互いに身を寄せ合ってカイの様子を窺う。

「おい。カイ」

止めるかのようなナギの言葉に耳を貸さず、カイは剣を引き抜いたまま住人たちにゆっくりと歩み寄る。

一体カイが何を始めようとしているのか、ナギにはさっぱりわからないままだ。

どうして自分が南方領主の息子だということを隠したのか。住居

が手に入る事はわかったのに、何故また脅すかのように太刀を抜いたのか。どうしてそんなことをする必要があるのかナギにはわからない。

唯一わかるのは、この住人たちは非常に日和見で、今の領主にも悪く思われたくなく、しかし新しい領主であるカイにも（現状ナギだと誤解しているが）背きたくない。そんな打算がありありと見えるということだけだ。しかしそれを責めるつもりは無い。民とはそういうものだ。

そんな住人たちを自分の側に着ける為に敢えて武力で脅すのか。カイらしくもない。

ナギは溜息をついて、どうせこの一件に口を出してもカイの目論見の邪魔をするだけだと割り切って成り行きを見守る事にする。

刀身を長に向けるとニツコリとカイが微笑む。

まるで悪意などないかのような笑みが、長や住人たちには逆に恐怖感を煽った。まるで楽しんで人を切り刻もうとしているかのように見えるからだ。

「僕たちに脅された事にするといいですよ」

全く脈絡も無く突然言われても、住人たちは震え上がるばかりで答えることが出来ない。

視線をゲインが消えた方角とは別の方へ向け、目は笑っていない口元だけを上げるような笑みを長へと向ける。

まるで長の首を狙うかのように真っ直ぐと伸ばし、そつと耳元でカイは長に告げる。

「あなた方は僕に脅されて、仕方なく家を一軒提供した事にするのですよ。いいですね」

拒否など出来ず、長は体を刀身から逸らした窮屈な体制のまま、何度も何度も首を縦に振る。

それに満足したかのように、カイは剣を長の首から離し、もう一本の皮で出来た薄汚れた鞆の剣の上に重ねるようにして、また左の腰へと納める。

そつと息を吐き、カイがナギへと顔を向ける。

「行こうか」

「ゲインは待たなくていいのか」

「大丈夫。どうせ暫くは掛かるだろう」

なるほど。だから2本の剣が必要だったのかとナギは今更得心する。

決して住人たちを脅すのに必要だったのではなく、ゲインが離れた後に自らの身を守るのに必要だったから帯剣することにしたのか。残念ながらナギには剣の心得は無い。用心棒には成り得ない。

ゲインが南方領からの追っ手なのか目付けなのかわからないが、手練の剣客を相手にしている。後はこの地を不当に占拠している「領主様」の手先だが、先ほどから気配が漏れているのが武術の心得の無いナギにもわかるくらいなので、カイ一人でも何とかなると判断したのでろう。

「というわけで、ご提供いただける家までご案内いただけますか」
住人たちに拒絶する事なんて出来るわけもない。

木立を抜けたところにある小さな集落の外れの、あまり整っていない一軒の家に住人たちはカイとナギを案内する。

「急な事なので、こんな場所しか」

また剣を抜かれるのではとビクビクしながら長が窺うのを、カイは首を傾げて不思議そうに見る。

「ここは誰も住んでいらつしやらないのですか。本当にどなたのご迷惑にもならないでしょうか」

今度は長が首を傾げる。

「……あの？」

ゆっくりと視界を巡らせて溜息を吐くと、カイは長に先ほどよりは声のトーンを少し落として話しかける。

「とりあえず中を案内してください」

冷やかさを含むその言葉に、長は慌てて家の軒先の大きな石を

持ち上げたかと思うと鍵を取り出し、家の扉を開く。

ここは長の親戚の持ち家で、現在は空き家になっているものになる。

扉を開くとむわつと埃っぽい臭いが広がりナギは顔を顰めるが、カイは気にする様子も無くナギを押し込み、ポンつと長の肩を叩いて中へと促し、そつと後ろ手で扉を閉める。

思いも寄らぬ形で家に閉じ込められた長は挙動不審に首を左右に小刻みに動かし、背中をべつたりと背後の扉につけてカイから距離を取る。

その様子を申し訳なさそうに眉を寄せてカイが見つめる。

「怖がらせてすみません。ずっとこちらの様子を窺っている人影が見えましたので、手荒な事を致しました。長や皆さんにご迷惑をあまり掛けたくありませんでしたので、敢えて剣を抜かせていただきました。大変申し訳ありません」

深く頭を下げるカイの様子に、長はきよとんと目を見開き、カイとナギの様子を交互に見比べる。

終始一貫して新領主（だと思っ込んでいる）ナギは口を開こうとはせず、この腰のやたらと低い男ばかり話しているのも不審に思うし、それに何よりも掌を返したかのような豹変ぶりが、かえって裏があるのではと思えてくる。

人懐っこい笑みを浮かべる男だが、先ほど剣を抜いた時のどこか狂気を孕んでいるかのように見えた瞳が長の脳裏に色濃く、とてもカイの言葉を額面どおりに受け取る事が出来ずにいる。

腕組みをして二人の様子を見ていたナギは、カイが傀儡だとか覇気が無いだとかと評価される理由を、今更ながらに思い知らされる。第三者的に見ると、一庶民に媚びへつらうかのように見えるかもしれない。

領主の長男なのだから偉そうに踏ん返り返っていればいいのにと言っていたのは、あの肉たるま女だったか……などと思っ起こして改めてカイを見る。

もうちよつと偉そうにすれば、俺が南方領主の息子に間違えられる事も無かったのに。そもそも、間違えられた事に腹を立てたりしないのだろうか。いや、するわけもないか。カイなんだから。

「ここにあなた方が自主的に僕たちを招きいれたとなれば、不利益が生じるでしょう。余計な波風を立てる必要も無いでしょう」

「……ああ、はい」

「脅されて仕方なくこの家を提供したのです。いいですね」

それさえも長には脅迫に聞こえるのだが、黙って頷き返す。

「重ね重ね申し訳ありませんが、暫くこちらをお借りできますでしょうか」

「かまいません。構いません。どうぞ、どうぞお使い下さい」

ぺこぺこと頭を下げる長に苦笑し、カイはぼりぼりと頭を掻く。

「怖がらせすぎましたね。すみません。皆さんお待ちでしょうから、どうぞ」

カイが扉に手を伸ばすと、長はぎゅっと目を瞑ってしまふので、カイはふっともう一度苦笑する。

内側から押された扉はゆっくりと開き、扉の向こう側には長の様子を心配そうに見つめていた一団が見える。その集団と目が合つと、皆一様に目を逸らしていくので、カイは「困つたな」と小さく呟く。何が困つたのかさっぱりわからない長は、後ろ向きに転がるように家から出て行く。

その様子を見守ろうかと思つたけれど、自分が見ているとまた怖がらせてしまうと思ひ直し、カイは扉をゆっくりと閉める。

扉を閉め、薄いカーテンから外の様子を覗いてみると、様子を感じと窺っていた不審な男が住人たちに近付き、住人たちはまた体を寄せ合つてその男を迎える。

「あれが領主の手先だな」

ナギが壁に寄りかかったまま呟くと、うんと軽くカイが返事をする。

「僕は聞いてなかったんだけど、領主がいるなんて」

「こつちに話が来なかつたつてのは、それだけここが辺境だつてことと、ある意味厄介な事が起こつてゐるつてことだろつ」

「んー。そうだね。その辺りはゲインが捕まえてくるのにも聞くことにしようか」

遣り取りを途中まで見ていたが、見ていたから何かが解決するわけでもないので、二人は共に窓の傍を離れる。

さほど寒いわけではないが、カイは暖炉が使用できるか確認するように、薪をくべて火を起こします。

手持ち無沙汰なナギが平屋建ての家の中を見回すと、暫く使つていないけれど、手を入れれば十分に快適に暮らせそうな家だということがわかる。

調度品だつてそれなりの物を使つていそうだし、テーブルの厚さもそれなりにある。椅子だつてただ腰掛けられれば良いというよりは、ゆつたりと座れるように作られているように見える。更に、暖炉の傍には安楽椅子まで置かれてゐる。

「あんまり怖がらせるつもり、無かつたのに。よつぽど怖かつたんだね、きつと僕たちのこと」

「僕たちじゃなくて、お前の剣だろ」

作業をしながら言うカイにナギは呆れ返り言い捨てると、カイは作業を一端取りやめ、立ち上がつて腰にぶら下がつた2本の剣を見つめる。

「これ、そんなに切れ味良くないのにね。特に派手なほうは」

「んなの、素人が見てわかるかよ。オレには十二分に人が殺せそうに見えるしな」

「それは良かった」

そう言うときカイはナギに人好きのする笑いを浮かべる。

話の内容とは真逆の笑顔を目にしたナギは、カイとは逆に口をへの字にしてカイを睨みつける。

「何を企んでゐる」

「余計な事はしたくないから、あつちから避けてくれたらいいなと

思っただけだよ」

カーテンをそつと開け、隙間から外の様子を眺めると、住人たちはまだ男と何やら話している。一体何を話しているのか、外界と遮断されている二人には全くわからない。

そもそも、まさか支配者が別にいるなんて思ってもいなかったので、会話の想像も一般的なものしか出来ない。

何であいつらを引き入れたんだとか、どうして家をくれてやったんだとか。

己の発想の貧困さはこの際横に置いておいて、これからどうするかが重要だとナギは思う。

「カイ」

「んー？」

窓の外を注視したまま、気の抜けた返事をするカイの肩をナギが掴む。

掴まれたまま振り返ろうともせず、カイはただひたすらに外の様子を眺め続ける。小さな「何か」を掴もうとして。

ナギはそんなカイの様子に呆れる様子を見せることも無く、どうせ聞いているのだろうと話を続ける事にする。

「もう一度聞く。お前はどうしたいんだ」

問われたカイはカーテンから手を離し、ナギの瞳を真っ直ぐに見つめ返す。

何も悩みなんて無い澄んだ瞳とも思えるし、何も無い空っぽの瞳にも見える。

「本当に何がしたいのか、わからねえのかよ。オレにはお前が何らかの意思を持って動いているように見える。だから剣の柄を握る事も躊躇わねえんだろ。民を脅すなんてらしくねえ事、何でした」

「何でって」

「お前の望みは何だ。言えよ。オレはお前の望みを叶える為の道具だろうが」

ナギの言葉に、カイの顔が翳る。

目を伏せ、ゆっくりと首を左右に振ったかと思うと、カイは大きく息を吐く。

何も言わず、ナギはカイの言葉を待ち続ける。

生まれた時からカイの片腕と決まっていた自分の人生。南方領主の息子（当時は上にまだ兄が何人かいた）の幼馴染として、業務の補佐を出来る右腕として。もともとナギが無能であったのならば、その役目は他の幼馴染の誰かに譲られていたのだが。

幾人かいたカイの周囲の小姓は一人減り、二人減り、競争に勝ち抜いて最後に残ったのがナギだ。

その事にナギ自身も誇りを持っている。それと同時に、自分の人生がカイの添え物でしかない事も知っている。そして最高の添え物になる事がナギの信条。

カイをいかに輝かせるか。だからこそ、他人がカイを批判して嘲る事が許せない。それはカイを支える自分への批判でもあるからだ。「違うよ、ナギ」

「何が違う。オレはお前が生まれた瞬間から、お前の家臣になる事が決まっていた。友であるが、南方領主の長男の側近であると弁えている」

「いよいよカイの表情が曇ってしまっ。

「そんなものを望んではない」

下唇を噛んでいたカイが意を決したように口を開く。

「ナギは僕の部下じゃない。僕はそうは思っていない。だからいつてお友達ごっこをしたいわけでもない」

「じゃあ何だ」

「僕はね、南方領主なんかにならなくていい。ナギ。君の失ったものを取り戻したい」

「何、言っやがる」

「僕は何も失っていない。全てを失ったナギ、僕は本当に申し訳ないと思っっている。僕自身のことはどうだっていい。ただ、僕はナギをこんな目に合わせたヤツらが許せないんだ」

思いもかけないカイの心中に、問いかけたナギは言葉を失ってしまふ。ずっとこの三ヶ月以上の間考え抜いた答えがそれか、と。

何故かナギは足元がふわりと軽くなって、ぐらぐら視界が回るような感覚を覚える。

カイの為にと思つて日々過ごしていたのに、カイ自身によつて自分の立ち位置さえ覆されてしまつて、二の句を告げられない。

「死んだ人を生き返らせる事は出来ない。だからね、ナギ。僕は君を頂点に立たせる。それが僕の復讐」

目を細め、カイは口角をすーつと上に引き上げる。

「許さない。ナギをこんな風に腑抜けにしてくれた連中をね」

「腑抜けてなんか」

「いるよ。あの日以来、全然ナギの口調にも思考にも切れ味が無い。状況を打破する内政の要としてのナギはそんな凡人じゃなかった。

それほどまでにナギの心は深い傷を負つたんだろっ」

ナギは言葉を失つて立ち尽くした。

剣がペンより勝る事は無い。それをオレはこの南方領で証明してやる。

カイが要職に就かざるを得なかつた頃、そんな言葉をカイに投げかけた。それなのに、今の自分は何だ。カイの思考一つ読むことが出来ない。このままでは。

「オレはお前の荷物になんかなりたかねえよ」

精一杯の虚勢を張つて、けれどこれまでのように目を吊り上げたりする事も無く淡々とした様子で口元をにーつと横に引く。

「復讐は楽しそうだが、オレも別に南方領なんていらねえな。どうせならこの大陸全てが欲しい」

「随分欲深だね」

「欲深で結構。そのくらい試してみろよ、カイ。出来るんだろっ？

オレのために復讐してくれるんだつたら」

「それはちよつと無理。まずは今この空腹をどう満たすかのほうが差し迫つた問題だなあ」

暢気なカイの様子にナギが頬を緩ませる。

「悪かったな。もう少しまともになるわ」

「それは良かった。じゃあ当然ナギが南方領主の長男ね。どうせ今ゲインが追っているの以外は、僕が南方領主の長男だっていう真相は知らないんだから」

そこに何故拘るのか、ナギは最近使わなかった知恵の源を掘り下げる。

本当にナギを担ぎ上げるつもりなのか。

指の爪を噛むナギから視線を逸らし、カイはカーテン越しに繰り広げられる光景に目を向ける。その様子をじーっとナギは見つめ続ける。答えはカイの中に必ずある。

「復讐のためにか？」

「うん」

言い切ったカイをナギはせせら笑う。

「オレの為に可愛い弟をその剣で斬ることが出来るのか。裏切った麗しい婚約者殿を不幸のどん底に突き落とす事が出来るのか。それだけの覚悟があるのか。しかもおまえ自身のためじゃなく、オレの為にそれをすると言うのか」

絶対そうじゃない。直感だがナギはそう思った。本当にカイが渴望しているのは、そんな血で血を洗うような戦いじゃない。

ナギの睨んだとおり、カイは言葉に詰まる。

「オレを担ぎ上げるメリットは何だ。何から逃げてんだよ、カイ」
問われたカイは静かに溜息を吐く。

「急にキレが良くなって困る」

苦笑したかと思うと、カイは天を仰いで深く息を吐く。

「誰かが南方領主の長男をやらなきゃならないんだろ。ならば、僕より優秀なナギがそれをやるべきだよ」

「……お前が逃げてんのは、お前自身からか。ど阿呆」

「ああ。そつだよ。僕が僕自身のために南方領主の長男であることが苦痛なんだ。担がれる価値は僕にはないと思っっているからね」

ナギは口を噤んでカイを観察する。

やけに卑屈で自己否定ばかりするカイの真意を掴む為に。そしてカイ自身が自分の事を語りやすくなるように。

いつの間にか窓の外の話し合いは終わっているようだが、屋敷の中の二人の興味は既に外の出来事からは失われている。暖炉からは薪の爆ぜる音上がる。

その音と呼応するように、カイが暖炉に何かを放り込む。それは普通よりもたなびく煙が出て、ゲインに居場所を教える合図にする為のものだ。

淡々と作業を終わらせると、カイはまた口を開く。

「僕はたまたま南方領主の息子に生まれた。血縁至上主義の南方領において、それは絶対的な権力を得る事を示している。それが当たり前だと思っていた。疑いもしなかった。だから政治なんかに手を出した」

「周囲に望まれたしな」

「うん。例えば僕が無能であっても、南方領主の血を引いているというだけで良かったんだ。それだけで最高の地位も住まいも約束されていた」

「しかしお前は結果を出したじゃないか」

「そうだね。そうかもしれない。それでもさ、僕には向いてないと思うんだよ。その絶対的な血の御旗がある限り、誰も背かないから出来ただけ。ああ、背かれた今何を言っているんだって話だけどね」
おどけるカイにナギが顔を顰める。

もしかして、こいつ裏切られた事がショックで、それを引き摺っているだけなんじゃないのか。

ふとナギの頭にその事が過ぎる。

誰が見ても可愛がっていたクソ愚弟様。どう見ても下心見え見えでもカイのご寵愛を受けていた強欲婚約者。

ナギにとっては無価値に等しい連中でも、そいつらを含むこの企てに乗ったヤツラに切り捨てられたことによって、己の価値を見失

ったのだろつ。

うだうだと言葉を捏ねくり回しているが、早い話が自信喪失っただけなのでは。

自分の中で出た結論に合点がいき、ナギは再びカイの顔を見る。よくよく見れば、以前カイにあった無条件に人を和ませる雰囲気は跡形もなくなり、悲壮感だけが漂っているように見える。

カイの事は言えないが、ナギもまた自分を見失っていたのだろつ。どうやってカイに自分を取り戻させるのか、ナギは再び思考を巡らせる。どうやったカイがまた「南方領主の長男」に戻るのか。しかし下手な小細工をすれば、逆効果になりかねない。

「つたく」

知らず知らず、ナギは舌打ちしてしまう。

何でカイの思考が読めないと思ったのだろつ。目の前の出来事に頭を巡らせることをしなかつたのだろつと、今更ながらにナギは後悔する。

ナギを頂点につけるためではなく、カイがカイとして南方領に返り咲く為にカイが自発的に動き出すように働きかけなくてはと、爪を噛みながらナギはカイを見つめる。

今まず出来る事は何だ。何をカイにやらせればいい。

ふいにナギの頭に二セ領主様のことが浮かぶ。まずはそれから片付けるか。しかしカイが己の采配でこの事態を解決しなくては意味が無い。例え「ナギから全てを奪った連中への復讐」の一步と考えたとしても、だ。

「とりあえず好きにしろ。お前がしたいようにすればいい。とりあえず今はオレが南方領主の長男って事にしておけばいい」

意外な答えにカイはきよとんと目を丸くする。

「僕の話、ちゃんと聞いてた？」

「聞いた。だから好きにしろ。それが答えだ。お前がお前を過小評価しているうちは、何にも変わらねえよ」

それが将来的には自分が上に立てという言葉だという事は、カイ

にはわかる。

ここまで共に傍にいてくれたナギとゲインのことを思うと、南方領主の長男を投げ出す事は申し訳ない気持ちもある。だから、二人の期待に応えたいと思う。けれど、同時にそこまでしてもらおう価値がないとも思う。

「でも……」

「うるせえ。今すぐ答えを出せなんて言っただろ。とりあえず好き勝手してみろよ。めんどくせえ事は全部オレが引き受けてやるから」

ナギの言葉に、カイは力なく微笑む。

「うん。そうさせて貰うよ。ありがとう」

結局カイはナギに「南方領主の長男」を託し、その部下として動く道を選び取る。

それが後に「稀代の詐欺師」という異名を持つ所になったのかどうか。その判断は後世に下される事だろう。

翌日、カイはゲインから偽領主問題が複雑な問題を孕んでいることを知る。

どうやらその男は東方領主の差し金でここに居を構えているらしい。

そしてこの南方領にとっては由々しき問題を解決させる為にといいう側面が、死刑ではなく流刑になった背景にあることを知る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2350q/>

PARADISE ~ 建国記

2011年3月1日23時10分発行